

学習院が所蔵する徳川宗家旧蔵書について ——忘れられた華族会館寄贈図書——

広瀬 淳子

論文要旨

学習院大学図書館書庫には『華族会館寄贈図書目録』が眠っていた。この中の寄贈者欄に「徳川家寄附」とあるのに着目したのをきっかけとして、徳川宗家旧蔵書の学習院への伝来の経緯と、その事実が現在まで伝わらなかった理由を解明した。

華族会館は設立当初、図書館の創設を計画していた。幹事尾崎三良が勝海舟に協力を依頼し、それを受けて明治8年7月10日、徳川宗家は華族会館へ和漢書約1,100冊、洋書1,000冊余りと2,000円を寄附した。2年後の明治10年、華族会館は学習院を設立し、収集した図書のほとんどを学習院に寄贈した。そして明治16年に学習院に建設された図書縦覧場は「縦覧場は本院の職員教師生徒及び其他華族の縦覧する処とす」と規則にあるように教師・生徒だけでなく華族のための図書館でもあった。

上記事実は『勝海舟日記』『華族会館誌』『尾崎三良自叙略伝』等、維新後100年余を経て刊行された明治初期の記録類のなかで語られていた。蔵書伝来の経緯は当時の流動する政治状況を反映していた。

キーワード【徳川宗家・華族会館・学習院図書館・勝海舟・明治維新】

目次

はじめに 学習院で見つかった徳川將軍家旧蔵書

1. 寄附の記録

(1) 『華族会館誌』

(2) 『勝海舟日記』

2. 二つの『蔵書目録』

(1) 『蔵書目録』会館書籍局一『華族会館蔵書目録』

(2) 『蔵書目録』学習院一明治十二年十月『華族会館寄贈図書目録』

3. 蔵書印 (1)「養賢閣図書記」(2)「杉阪氏蔵書」

4. 学習院が所蔵する徳川宗家旧蔵和漢書の概要

5. 寄附の背景 (1) 徳川宗家 (2) 華族会館 (3) 学習院

おわりに 揺籃期の明治政府を支えた徳川宗家・旧幕臣たち
付表 参考文献

はじめに

学習院大学図書館が1,100冊余の徳川宗家旧蔵の漢籍を所蔵していることは、これまでほ

とんど知られてこなかった。これらは徳川家が華族会館へ寄附し、その後まとめて華族会館から学習院に寄贈されたものであり、その中には古活字版『史記』等、貴重書が多く含まれる。徳川宗家からは、漢籍ばかりか相当数の洋書も寄附された。本稿は、この寄附の事実を解明するとともに、その背景を考えるものである。

所蔵が判明したきっかけは、著者が学習院大学図書館職員だった際、『華族会館寄贈図書目録』¹⁾を図書館書庫の中から見つけだし、その目録の寄贈者欄に徳川昭武、徳川茂栄の他に「徳川家」とあるのに着目したことであった。それが徳川宗家を示すことが、『華族会館誌』²⁾および『華族会館寄贈図書目録』の記載内容を照合することで裏づけられたのである。加えて近年、徳川宗家所蔵の漢籍に「養賢閣図書記」と押印されていることが徳川記念財団によって明らかにされた³⁾。この共通の蔵書印の存在は徳川宗家が蔵書の一部を華族会館に寄贈し、それが学習院に伝わったという書籍の流れを確実に証明する。

また、『勝海舟日記』には寄付の顛末が記されていた。海舟は寄附した書籍が華族会館から学習院に移ったことを把握していた。

以上の内容を述べるために、最初に『華族会館誌』『勝海舟日記』⁴⁾『華族会館蔵書目録』『華族会館寄贈図書目録』等が徳川家から華族会館への寄付行為をどう記録したかを検討し、さらに蔵書印の調査からわかった徳川宗家と学習院の蔵書の関連に触れる。引き続き徳川宗家、華族会館、学習院をめぐる明治初期の情況をとりあげ、一連の調査を通して浮かび上がった、旧幕臣たちが明治初期に果たした役割について考える。

1. 寄付の記録

(1) 『華族会館誌』

『華族会館誌』とは、華族会館・霞会館の内部資料、いわば業務日誌のようなもので、影印版が昭和61年(1986)に出版されるまでは一部の人しか見ることができなかった。

この中に3ヶ所、徳川宗家から華族会館への寄付に関する記載がある。句読点を加え、改行したものを以下に転記した。仮名遣いは原文のまま、片仮名は平仮名に、旧字体・異字体は新字体に改めた⁵⁾。(以後の『華族会館誌』からの引用も同様。)

[史料A] 明治8年1月24日(『華族会館誌』上巻84頁)

参議 勝安芳⁶⁾ 書を本館に寄す。其略に云、

客年来華族集会主として書籍局建設の議あり。

而未た着手せしを聞かず、遺憾と謂ふへし。

若し今より其端緒を開き僅少の書籍と雖も之を貯蔵し

漸を以て群書を購集し、以て大成するに至らは国家の裨益少しとせず。

今、諸君意を決して着手せられは、旧主家 徳川家達 蔵書一千巻並金二千元を寄附せしめ、
以て其創設費用の万分を助けんと。

是より先き、本館既に書籍局建設の議粗ほ決す。

今此書を得て衆皆感激、其議愈熟す。

[史料B] 明治8年7月10日 (『華族会館誌』上巻91頁)

勝安芳 其旧主家 徳川氏蔵書漢籍四十四部洋書六百二十四部合計三千百四十巻
並に金二千元を寄附す。

[史料C] 明治13年2月21日 (『華族会館誌』上巻295-296頁)

徳川家達 曾て本館に寄附せし書籍中左の書籍は諸家由緒ある書籍なるを以て
返付せん事を申出す。即ち之を聴す。

皇朝戦略編	15冊	古今鍛冶備考	7冊
名節録	3冊	文選六臣註	31冊
唐文粹	24冊	文章達徳録	6冊
王白田集	12冊	韓文起	10冊
文章正宗	23冊	白氏全集	25冊
通計	10部		

[史料A] の明治8年1月24日の記述から華族会館に図書館建設の計画があり、そのために徳川宗家が書籍と現金を寄附したことがわかる。また「衆皆感激」という箇所から華族の間で当時の徳川家の信が篤かったことがうかがえる。

このときの文書の原文を坂田充氏が紹介している。国立公文書館の『岩倉具視関係文書』のなかに綴じられ、以下の文言が付されているという。「華族会館」の罫紙が用いられているというので、原本ではなく写しであろう。また、寄附の日付を実行された明治8年7月ではなく書簡を受け取った1月としていることから、文言は後年書き加えられたと考えられる。

[史料D]

書籍 千巻

冊数

漢籍千式百九本

洋書千八百五拾一本

右、勝安芳より旧主家徳川家達蔵書を寄附す

外に金式千円添

明治八年一月⁷⁾

[史料B]の明治8年7月10日の寄附の内容は以下のとおり群を抜いたものであった。

第一に、漢籍の中には『史記』『韓非子纂文』など現在学習院が貴重書に指定している資料、また明治天皇や冷泉家から伝来したものも含まれていた(後掲の付表「学習院に寄贈された徳川宗家旧蔵和漢書」を参照)。

第二に、明治8年当時、洋書624部もインパクトのある分量といえる。これは『勝海舟日記』によれば、華族会館に寄附するために1,100円で購入したものである(後述)。

第三に、寄附金2,000円は当時の華族会館では桁違いの高額である。徳川家に続いて同年秋に、三条実美他の在官華族24名合同で同額2,000円を寄附している。それ以外で明治8年の華族会館への現金の寄附は10円から100円までの数件のみである。参考までに『華族会館誌』から当時の寄附の額を抜き出して以下に転記した。

明治8年 華族会館への会員等からの寄付金一覧(『華族会館誌』から抽出)

(明治)年.月.日	氏名	寄付金額
8.3.16	竹腰正美	10円
8.7.10	徳川家達	2,000円
8.11.12	亀井茲監	100円
8.11.14	三条実美以下在官華族24名	2,000円
8.12.2	柳沢光昭	20円
8.12.9	大谷光尊	100円 + 9年以降毎年50円
8.12.14	松平親良	50円
8.12.17	大給近説	50円
8.12.17	松平直己	100円

なお『学習院第一年報』には開学時の明治10年に学習院が受けた寄附の一覧が記載されている(最高額は前田利嗣の三千円⁸⁾、徳川家達は五拾円)⁹⁾が、『学習院百年史』等の学習院の発行物に明治8年の徳川家寄附の件に触れたものは見当たらない。

昭和41年に発行された霞会館編『華族会館史』は、海舟の手紙の内容を引用したうえで徳川家から書籍が寄附されたことのみを取上げている¹⁰⁾。付録の年表には明治8年(1875)11月14日「三条以下在官華族二十四名金二千円を本館に寄付す。爾後これに倣う者増加す¹¹⁾」とあり、徳川家の寄付金には触れていない。また『学習院第一年報』から転記して学習院へ寄附した金額の一覧を載せているが、なぜか前田利嗣の寄付額は三千円でなく三十円となり、その結果最高額は岩倉具視の金千三百貳拾五円となっている¹²⁾。(『学習院年報』は

「拾」を用いて「十」は使用していないので、『華族会館史』編集者が、三千を三十と読み違えたとすれば相当な思い込みか。)

『華族会館の百年』も年表に三条以下 24 名の寄付を載せるばかりで、徳川家には触れていない¹³⁾。

このように、『華族会館誌』の記録が従来あまり吟味されてこなかった。何よりもまず『華族会館誌』にたちもどって考える必要がある。

しかしながら、『華族会館誌』の記録にも疑問が残る。

[史料B] では寄贈巻数 3,140 巻とするが、これは次の『勝海舟日記』明治 8 年 7 月 10 日の記述と食い違う。

[史料E] 華族会館へ三位殿より金二千両 (=円)、洋漢書籍二千余巻相納む。¹⁴⁾

ここで「三位殿」とは徳川宗家第 16 代、当時従三位だった徳川家達 (いえさと) のことである。勝海舟は徳川宗家の寄贈巻数を「二千余巻」としているのである。

『読売新聞』1876 (明治 9) 年 1 月 28 日朝刊 1 面には「華族の徳川家達君 (旧亀之助君) は書物を二千四百部あまり献納されて紅白の縮緬を二十疋いただかれ…結構な事でござります」と記載されている。この記事は徳川家から華族会館への寄贈の件を指すと考えられ、その部数は海舟の数字 (二千余巻) に近い。

食い違いの原因を解明するヒントは前述の [史料D] に見出される。そこには「冊数」: 漢籍 1,209 本、洋書 1,851 本と記されている。ここで洋書に注目したい。「本」は「冊」と同じ意味で用いられていると考えられるので¹⁵⁾、その「洋書 1,851 本」だけで明治 9 年 10 月の華族会館の洋書の蔵書数 1,686 冊 (後述 5.(2) 参照) を超えるのは矛盾である。もし付録や数学の解答集なども別個に数えて加えていたとしても、大差は生じないはずである¹⁶⁾。また当時の洋書は貴重だったので、華族会館が処分してしまったとは考え難い。

確認のため洋書の寄贈に関連する『華族会館誌』記載事項を調査し、表にまとめた。

洋書寄贈関連事項等一覧 (『華族会館誌』から抽出)

(明治)年.月.日	寄贈者	内容	部数・冊数
8.2.25	土方雄志	各種洋書 (洋書)	30 冊
8.3.21	五条為栄官員	儀式録 (洋書)	1 部
8.3.30	毛利元敏	洋等書	8 部のうち
8.7.10	徳川氏	漢籍 44 部洋書 624 部	合計 3,140 巻
9.3.17	渡部章綱	英仏和会話初篇	500 部
9.3.17	渡部章綱	英仏通語	50 部

9.10.24…………… 書籍局蔵書数…… 英 1212 仏 261 独 213…………… 1,686 冊

五条為栄官員寄贈の儀式録、渡部章綱寄贈の『英仏和会話初篇』『英仏通語』は実物がそれぞれ1部は1冊からなる。また（受け入れた書籍を処分していなければ）寄贈の合計が明治9年10月24日の華族会館書籍局の蔵書数1,686冊を上回ることはありえない。以上を前提条件とすると、徳川家寄贈洋書（624部）は下記のとおり1,105冊より少ないことになる。

$(30+1+500+50)$ 冊+8部+624部 \leq 1686冊 \rightarrow 8部+624部 \leq 1105冊

従って「洋書1,851本」は間違いである可能性が高くなる。

恐らく「624部」は、後述する勝海舟「戊辰以来会計荒増」のとおり、洋書1000冊ほどに相当すると考えるべきであろう。計算上、妥当な数字である。

食い違いの原因を、徳川家と前後して納められた松平頼聡寄贈分（35部3,051巻）¹⁷⁾と中身の一部混同したためではないかと、当初著者は考えていた。

ともあれ徳川宗家寄贈分の漢籍および洋書が2千余巻であったとしても、松平頼聡の寄贈分と合わせると華族会館蔵書10,508冊の過半数を占めていたことになる。洋書に限って言えば、徳川宗家寄贈分だけで全体1,686冊の約6割を占めていた。

付け加えれば、華族会館は7月10日、寄附を受けるのに先立ち、元老院議員に補せられ7月6日に華族会館の幹事を辞任したばかりの秋月種樹を書籍監長に任命している¹⁸⁾。秋月が8月7日に再び公務多忙を以って辞任したところから推測すると、徳川宗家から多額・大部の寄附を受けるにあたり、わざわざ旧幕府の学問所奉行であった秋月を一時的に起用することで、謝意と敬意を表する態勢を整えて臨んだと考えられよう。

[史料C]の明治13年2月の記事については、当時徳川家達は英国留学中だったため、華族会館を訪れたのは代理人であろう。『華族会館誌』のなかで徳川宗家寄贈図書の具体的な書名が記載されているのはこの箇所だけである。

「即ち之を聴す」とあるが、実際には列挙された資料の多くは戻されずに学習院に残されていた。既に華族会館と学習院の蔵書印が押されていたため引き取るのを中止したのではないだろうか。（あるいは徳川家が同一書名の別の資料と差し替えたという可能性も考えられる。）

ただし、『名節録』は『華族会館寄贈図書目録』にも記載がなく消息がわからない。また『韓文起』『文選』は学習院大学図書館に残された古い原簿¹⁹⁾に「焼失」とあるので、明治19年の火事で焼失したと考えられる。

『華族会館誌』には会館が寄附を受けた品目（図書の場合は書名と冊数）と寄贈者名が記

録されているが、徳川宗家分は具体的な書名・冊数が（返却の申出があったもの以外は）省かれている。記録するには分量が多すぎたのだろうか。それとも別に目録があったのだろうか。

(2) 『勝海舟日記』

勝海舟自身の日記が、咸臨丸「艦長」としての勤務を終えた後の文久2年（1862）8月17日から、晩年の明治31年（1898）12月31日までについて、残されている²⁰⁾。

日記には徳川家から華族会館への寄付の顛末が記録されていた。以下、明治7年12月30日から明治9年8月29日までの日記と「戊辰以来会計荒増」から、関係がある部分を抜き出した。警察に監視され、日記を押収されたこともある²¹⁾なかで書き残された箇条書きの羅列のような記録であるが、列記すると詳しい経緯が見えてくる。

『勝海舟日記』より抜粋（『勝海舟全集』第19巻515頁、第20巻4-85頁）

- 明治7年12月30日 尾崎三郎、書籍館（図書館）の話これあり、承知いたし遣わず。
- 明治7年12月31日 溝口へ…並びに書籍館出金の事等談ず。
- 明治8年1月15日 尾崎三郎、書籍館（図書館のこと）の談これあり。承知致す。卯三郎、百両持参並びに跡々の金子、書物にて納むべき旨談ず。
- 明治8年1月18日 金崎三郎²²⁾、華族方書籍館の儀につき同道。
- 明治8年1月19日 溝口へ三位殿より、華族書籍館へ献金二千元、書物千部相納むべき旨、相談。
- 明治8年1月20日 尾崎三郎、同人へ華族書籍館建設の儀につき一書を差し出す。尤同人頼みなり。
- 明治8年1月22日 卯三郎、書目持参。
- 明治8年1月27日 尾崎三郎。
- 明治8年2月7日 華族会館よりたいご（醍醐）忠広、三位殿、納金納書の返書持参。
- 明治8年2月13日 卯三郎、書物の事申し談ず。
- 明治8年2月19日 卯三郎、書目帳持参。
- 明治8年3月5日 尾崎三郎。
- 明治8年3月8日 瑞穂屋の書籍千両の上、今百両、中村返金にて相払い申すべき旨話し置く。
- 明治8年3月10日 瑞穂屋より洋書来る。
- 明治8年3月12日 溝口へ屏風の事、書物の事談ず。
- 明治8年3月15日 卯三郎、書目持参。
- 明治8年3月18日 卯三郎へ百両渡す。
- 明治8年3月22日 徳川家へ西洋書渡す。
- 明治8年3月28日 尾崎三郎。
- 明治8年4月5日 駒井竹所、御向へ書籍残らず相送る。

- 明治8年4月8日 尾崎三郎。
- 明治8年4月11日 尾崎三郎。
- 明治8年5月4日 尾崎三郎。
- 明治8年5月24日 尾崎三郎。
- 明治8年6月6日 尾崎三郎。
- 明治8年6月10日 尾崎三郎。
- 明治8年6月14日 尾崎、…。
- 明治8年7月2日 立花親従、京極従五位、華族会館納本の儀につき、壬生基修、口上申し聞く。
- 明治8年7月2日 溝口之勝、華族会館へ納金、並びに納本の儀、当日に納め方取り斗りの儀申し談ず。
- 明治8年7月10日 華族会館へ三位殿より金二千両、洋漢書籍二千余巻相納む。(前引 [史料E])
- 明治8年8月12日 尾崎三郎。
- 明治8年9月21日 尾崎三郎。
- 明治8年10月28日 尾崎三郎へ行く。
- 明治8年10月30日 尾崎三郎。
- 明治8年11月8日 尾崎三郎、…。
- 明治8年12月16日 尾崎三郎。
- 明治9年1月21日 尾崎三郎。
- 明治9年2月28日 尾崎三郎、…。
- 明治9年5月18日 尾崎三郎
- 明治9年7月1日 尾崎三郎。
- 明治9年8月3日 尾崎三郎、明後日北海道へ出立の暇乞い。
- 明治9年8月10日 貴志忠孝²³⁾、会館へ御書籍金子御差し出しの節、返答尋ねらる。
- 明治9年8月11日 嵯峨殿、…所存を申し述ぶ。其他会館へ三位殿より先年献金取戻しの事これある旨、内話。
- 明治9年8月11日 貴志氏、会館金□取戻しの事は御布告に従い池田部長へ承合の上の儀、詰り如何にても宜しき旨申し聞けらる。
- 明治9年8月29日 溝口勝如、会館へ二千両再納の儀、並びに…云々話、談これあり。

「戊辰以来会計荒増」(『勝海舟全集』第21巻 590頁、594頁)

- 明治7年4月9日 四百円 瑞穂屋卯三郎。此分書籍にて返納、学集院御納本。
- 明治7年4月23日 七百元 瑞穂屋卯三郎。此分後書籍にて返上、学集院御納の分。
- 明治8年1月19日 二千元 洋書書籍千部
尾崎三郎談の末、溝口へ談、三位殿より華族書籍館相納むべき儀決定

明治八年並九年分入込。一月十九日。七月十日華族会館へ納む二千元、洋書千部

日記をたどると、海舟は華族会館への寄付の実現に向けてきっちりと手続きを踏んだことがわかる。

明治7年12月30日に華族会館の幹事尾崎三良が来訪、書籍館のための寄付を依頼され、「承知いたし遣わず」とある。

尾崎三良は三条実美に仕え、明治元年、三条公恭に随って英国に留学して法律学を学び明治6年帰国。留学中の明治5年夏には英国から自費で渡米して、岩倉使節団の岩倉具視と木戸孝允に米国との条約改正交渉の中止を進言、日本の危機回避に貢献した²⁴⁾。帰国後は華族会館の設立に力をつくし、その特撰幹事となって華族の指導者として貢献し、明治29年男爵に叙せられた²⁵⁾。

翌12月31日には溝口勝如（徳川家の家扶、元勘定奉行）と寄付金を出すことを相談。

明治8年1月15日に尾崎三良から改めて寄付の依頼を受けて承知。洋書入手に向けて瑞穂屋卯三郎と打合せを始める。

瑞穂屋清水卯三郎は文久3年（1863）の薩英戦争では英国軍艦に通訳として乗艦。大久保一蔵（利通）の依頼を受けて停戦交渉をする²⁶⁾。1867年のパリ万博に日本から参加した際の活躍によりナポレオン三世から銀メダルを贈られ²⁷⁾、明治初期には洋書や歯科医療器具等の輸入業のほか印刷出版業も行っていた。明六社（日本最初の近代的学術団体といわれる）の会員で、会計責任者²⁸⁾。（卯三郎が徳川家から借金²⁹⁾をした時期〈明治7年4月9日、23日〉が『明六雑誌』創刊時〈明治7年4月2日〉と重なるのが興味深い³⁰⁾。）徳川家へ返金するかわりに相当額分の書籍を納めたのであるが、明治8年に2ヶ月で洋書1,000冊を取り揃えた卯三郎の手腕は驚異的である³¹⁾。

1月18日には尾崎三良を（徳川家に）同道。（溝口たちに引き合わせたと考えられる。）

1月19日に溝口と、金子「二千元」と書物「千部」を寄付することを決定。この「千部」は翌日の華族会館宛の文書（前述1. (1)。原文〈注7 参照〉および〔史料D〕）では「千巻」と表示されている（〔史料A〕〈文書の要旨〉では「一千巻」と表示）。海舟は「部」と「巻」を同じ意味で使用していたことがわかる。

1月20日には尾崎三良に、華族会館の書籍館建設の件についての一書を渡す。尾崎に頼まれて書いたものである。『華族会館誌』1月24日付けの「勝安芳書を本館に寄す」とある

のはこの文書を指すと考えられる（〔史料A〕参照）。

2月7日に華族会館から、それに対する醍醐忠広³²⁾の返書を持参。

3月10日、瑞穂屋から洋書が届く。

3月15日には瑞穂屋卯三郎が洋書の目録を持参。

3月22日に徳川家へ洋書を届ける。

7月2日には立花親従、京極従五位が訪れて、壬生基修（5月から華族会館副館長。館長職は空席）の口上を述べる。

7月2日に溝口と、7月10日実施の華族会館への金子・書籍の寄附の段取りを相談する。

7月10日、徳川宗家から寄附する二千元と洋書漢籍を海舟が華族会館へ持参する。

その間、尾崎三良が勝海舟を14回訪問。綿密な打合せがあったと推察することができる。

寄付の中身に関連して海舟は二千元の献金について溝口と3回、洋書を購入するために瑞穂屋と7回打合せをしているが、漢籍に関する記述は日記に見当たらない。唯一、明治8年4月5日「駒井竹所、御向へ書籍残らず相送る」とあるのが漢籍に関連する可能性を思わせる。駒井竹所はもと大目付駒井朝温のこと³³⁾。「御向」とは海舟邸の向いの徳川邸を指す。漢籍は海舟ではなく徳川邸の誰かが取りまとめたと考えるのが妥当であろう。逆に、洋書を中心に考えればよかった海舟にとって、「部」と「巻」「冊」「本」の区別はさほど重要でなかったのかもしれない。

ところで、寄附から1年後の明治9年8月、手続を踏んで贈った寄付金を徳川宗家側は華族会館から「取戻」すことを考えていたようである。しかし、8月11日「取戻し」に関する海舟と嵯峨殿（嵯峨実愛初代華族会館副館長を指すと考えられる）の「内話」の後、華族会館側の「如何にても宜しき旨」の見解を得て、8月29日に海舟は溝口と再度納付することを談じている。結局、「戊辰以来会計荒増」明治8年1月19日に、「二千元…明治八年並九年分入込」とあるので、寄付金を一旦「取戻し」た後に、改めて納付したのであろう。

なぜそのようなことが起こったのだろうか。

華族会館は前年10月の臨幸の際に下された詔勅により「凡そ華族たる者は悉く会員たるべき義務あり…旧禄高に割当て徴収したる金額七十余万円³⁴⁾を有する「富裕なる団体」となっていた。（徳川家も高額の負担をしたのであろう³⁵⁾。）その結果、明治9年8月には華族会館はもはや徳川家の援助を必要としない状況にあったことが「取戻し」の背景と考えられる。

この徳川家への返金の件に『華族会館誌』は全く触れていない。

また、「戊辰以来会計荒増」の明治7年4月9日と23日の「学集院」は学習院を指すと考えられる。（『勝海舟日記』には当て字が多い。）この記述は、徳川家が寄附した書籍が華族

会館から後に学習院へ寄贈された件を勝海舟が把握していたことを示している。

海舟と華族会館の関係では、以上の流れと平行して、華族会館が旧二本松藩邸を工部省から正式に借受けるのに、海舟が力を貸していた。明治8年1月19日、海舟の交渉相手は伊藤博文。伊藤はこの日、大久保利通、木戸孝允、板垣退助による「大阪会議」を斡旋するための大坂出張を控えていたという³⁶⁾。この時の伊藤博文から海舟あての書簡が残されていて、二人の親しい関係が伺える。

工部省所管の丹羽邸借用のこと何とか工夫あり度旨談じたる所、同氏の義侠心を發揮し、自ら工部卿の伊藤を訪問し此事を談じられたる所、伊藤も勝の義侠心に感じ、属僚の異論者を鎮圧して遂に此建物悉皆を借り受くることとなれり。

(『尾崎三良自叙略伝』上巻 149頁)

明治8年1月18日 鉦山寮の建屋1件。伊藤博文へ行く。不在。

明治8年1月19日 伊藤参議、鉦山寮の建物、旧知事へ払下げの事相談、承知の旨。本日、大坂へ出張につき、帰府、猶相談の旨返答これあり。

明治8年1月21日 大久保一翁³⁷⁾、華族館地所の事、其外…頼む。

明治8年3月5日 尾崎三郎、坂井生、東京府知事(大久保一翁)へ一封認め遣わす。

(『勝海舟日記』より抜粋 『勝海舟全集』第20巻4-10頁)

伊藤博文書簡 明治八年一月十八日

朶雲拝誦。今夕は四字より旧亭の方へ夜食之約束にて罷越候間、御差支無之候へば、明朝小生罷出可申候間、御在宅可被下候。

僕も明後日より又大坂迄一寸参り申度、其前是非得拝鳳過し度候。勿々拝復。

正月十八日

勝参議様

伊藤博文

拝復

(『勝海舟全集・別巻』〈講談社、平成6年〉209頁³⁸⁾)

永田町2丁目旧二本松藩邸現今鉦山寮の家屋授受の事を了す。…工部省其鉦山寮を本省内に移さんとす。是を以て其不用の家屋を借り以て議席を転するの事を同省及び東京府に申請し往返数回此に至て其事漸く成る。

(『華族会館誌』明治7年4月13日 上巻38頁)

鉢山権助一条基緒来館邸中の家屋を検し授受の事を了す。会席を此に転せしより今日に至まで仮りに約して家屋を鉢山寮に借る。此に至つて正約を結ぶなり。

(『華族会館誌』明治8年6月22日 上巻90頁)

『華族会館誌』は借用の正約を結んだという結果だけを記している。そこに至るまでの尾崎や海舟の働きは、『尾崎三良自叙略伝』『海舟日記』等で跡付けることができた。

2. 二つの『蔵書目録』

徳川宗家から寄贈された多量の書籍を華族会館はどのように管理したのであろうか。『蔵書目録』を調べれば明らかになるはずであるが、ここにも大きな問題がある。

これまで未公開だった『蔵書目録』が2点あった。

(1) 『蔵書目録』会館書籍局—『華族会館蔵書目録』(図1参照)

この目録は、他の蔵書目録等とともに学習院大学図書館書庫に保管されている。おそらく明治40年以降(後述の『華族会館寄贈図書目録』と同時期)に、表紙をつけて綴じる際につけたと思われる『華族会館蔵書目録』という名称を、本稿では用いることにする。

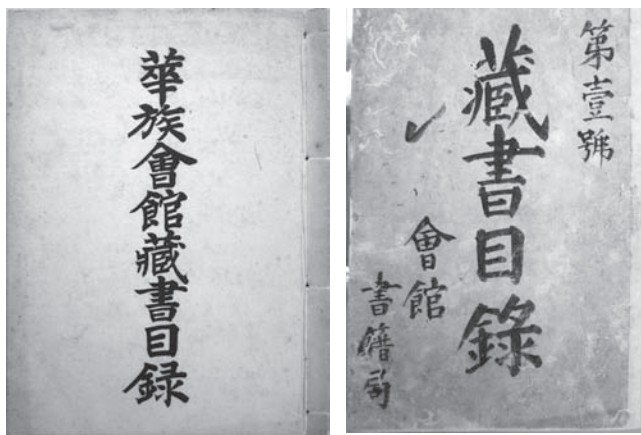


図1 『華族会館蔵書目録』表紙

もとの表紙には「『蔵書目録』会館書籍局」とあり、「会館書籍局」の罫紙が用いられている。学習院が現在所蔵しているのは蔵書目録の前半部分、書名のイロハ順のイからツまでの分で、後半部分の所在はわからない。第壹号第貳号からなり、中身は罫紙30枚、記載件数は186件である。

記載項目は年月・寄贈者名/購入・号、改行して書名・冊数である(図2参照)。日付は明治7年4月から9年12月まで。1件のみ明治11年11月分を含む。

『華族会館蔵書目録』には徳川宗家からの寄贈の事実は一切記録されていない(図2の「白氏文集」の項参照)。なぜ記載されなかったのかはわからない。徳川家側が公に出るのを遠慮したのかもしれない。徳川家達の孫にあたる保科順子氏は著作のなかで長い間「ご遠

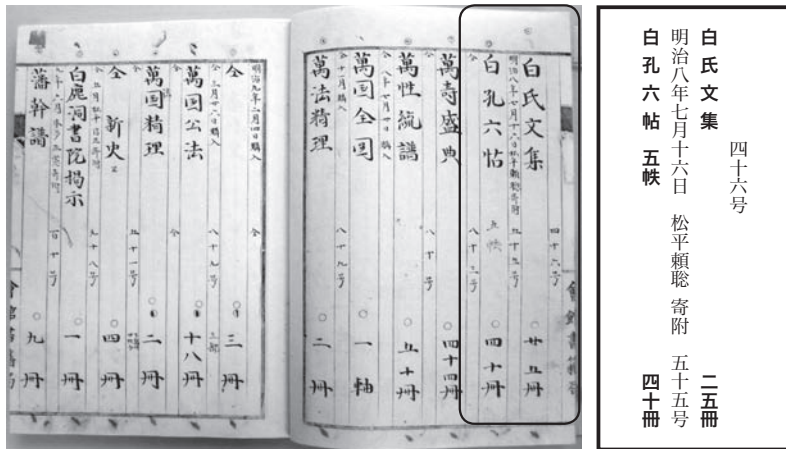


図2 「白氏文集」記載頁：『華族会館蔵書目録』
 (『蔵書目録』会館書籍局 第壹号 第4葉)

・白氏文集には46号とあり、年月日・寄贈者の記載はない。
 *目録の各書名の上と冊数の下に朱点が付されている。

慮」があったと書いている³⁹⁾。

(2) 『蔵書目録』学習院

—明治十二年十月『華族会館寄贈図書目録』学習院図書課 (図3参照)

実は『華族会館蔵書目録』とよく似た別の目録が、学習院大学図書館書庫に保管されている⁴⁰⁾。「明治十二年十月『華族会館寄贈図書目録』学習院図書課」と書かれた白い表紙をつけて、『蔵書目録』学習院」という表紙のついた和漢書目録と、洋書目録『明治十二年十月調査会館贈寄学習院英書目録』『明治十二年十月調査会館贈寄学習院仏独書目録』⁴¹⁾とが、1冊に綴じられていた。図書館が事務組織として学内で「図書課」と呼ばれるようになったのは明治40年か41年からなので⁴²⁾、表紙をつけての綴じ直しもそれ以降になされたことになる⁴³⁾。罫紙は『華族会館蔵書目録』と同じ「会館書籍局」のものが用いられている。

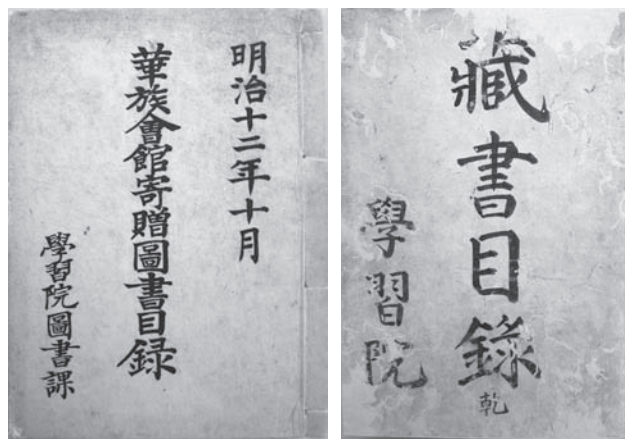


図3 『華族会館寄贈図書目録』表紙

『蔵書目録』学習院」というタイトルから、開学当初の学習院で蔵書目録として用いられ

ていたことがわかる⁴⁴⁾。本稿ではこの和漢書目録の名称に『華族会館寄贈図書目録』を用いることにする。乾坤2冊からなり、中身は罫紙81枚、記載件数は479件である。

記載項目は年月・寄贈者名／購入・号・番、改行して書名・冊数である(図4、5参照)。日付は明治7年4月から9年12月まで。それに学習院設立後の明治11年9月分4件と明治13年4月分の8件(8件とも一橋徳川家の徳川茂栄〈もちはる〉寄贈の漢籍)が追加記入されている。

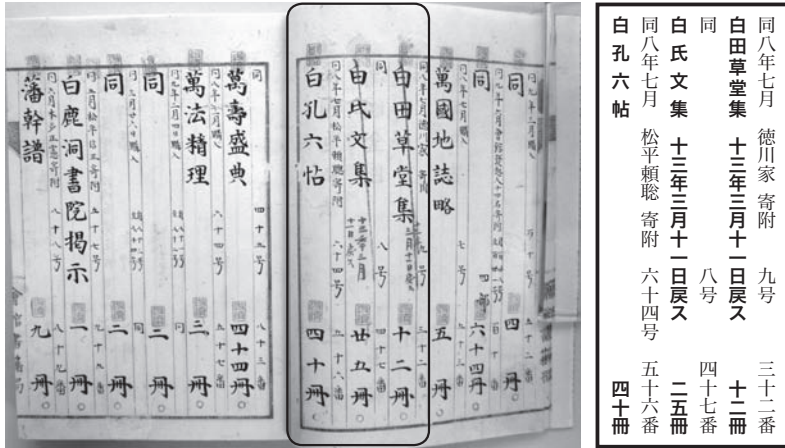


図4 「白氏文集」記載頁：『華族会館寄贈図書目録』
(『蔵書目録』学習院 乾 第5葉)

白氏文集には同〔=同8年7月徳川家寄付〕8号 47番と記載されている。

・書名に赤線を引き、「十三年三月十一日戻ス」と朱書されている。

*目録の各書名と冊数の上に「改済」の朱印が押されている。

『華族会館蔵書目録』の「号」と『華族会館寄贈図書目録』の「番」は微妙にずれながらほぼ対応して、概ね日付順になっている。すなわち、早く受入れたものには若い番が振られている(例：「白氏文集」46号：47番。「白孔六帖」55号：56番)(図2、4参照)。ここで「番」とは図書が収められていた書棚の番号を指すと推測される⁴⁵⁾。

『史記』は下巻(坤)の全49葉中、第33葉前半の最後の行に記されている(図5参照)。また目録の『白氏文集』は赤線で消して「13年3月11日戻す」と書き加えられている(図4参照)のが、『華族会館誌』明治13年2月21日の欄に徳川宗家に戻したとあるのと符合する。10件中8件が同様に合致したことから、目録に「徳川家寄附」とあるのは徳川宗家を指すことが裏付けられた。残り2件のうち1件は『唐文粹』で、目録に赤線や戻したという書き入れはない。もう1件は『名節録』で、目録にはなぜか記載されていない。

徳川宗家寄贈分で、この目録の寄贈者欄に徳川家と記されているのは誤記(5件・松平頼聡寄贈分を徳川家寄附としている)を除くと27件・779冊で、残りは記載がない(付表参照)。『華族会館蔵書目録』に欠けていた事項を他から補うのに遺漏があったのだろうか。

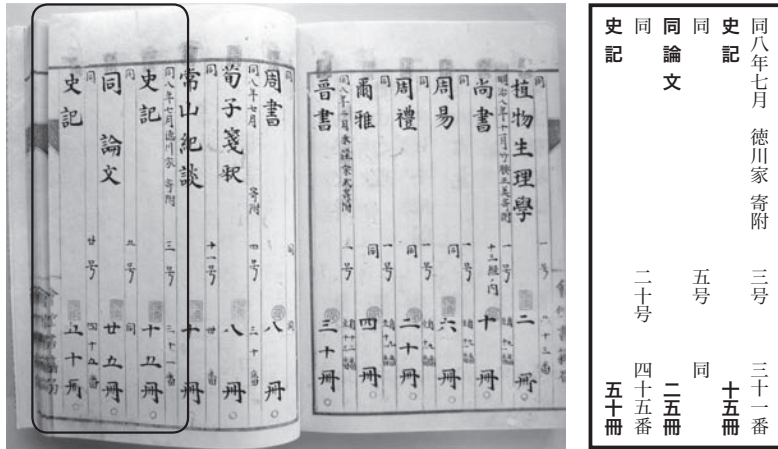


図5 「史記」記載頁：『華族会館寄贈図書目録』
 (『蔵書目録』学習院 坤 第33葉)

ところで、『華族会館誌』には記載がまったくなかった購入資料が『華族会館蔵書目録』と『華族会館寄贈図書目録』には記されている。明治8年7月購入のものが多数(100件553冊)見受けられるのは徳川家からの寄付金を使用したものであろう。『連邦商律』など、大部分は当時の新刊書である⁴⁶⁾。

3. 蔵書印

(1) 「養賢閣図書記」

学習院所蔵の徳川宗家旧蔵書には「養賢閣図書記」と押印されたものが『史記』など多数存在する(付表参照)。この蔵書印に関して、一橋大学と早稲田大学の蔵書各1点の目録にその印記を見つけることができた⁴⁷⁾。

早稲田大学所蔵分は慶応3年出版なので、蔵書印は江戸末期から明治初期に使用されていた可能性が高い。また蔵書印譜類を見るかぎり、江戸時代に「閣」を蔵書印に用いているのは前田家(尊経閣)、仙台伊達家(観瀾閣)以外はほぼ徳川家、松平家に限られる⁴⁸⁾。そこで「養賢閣図書記」は宗家第16代徳川家達のものであるという仮説のもとに静岡学問所、静岡藩関連の文献にあたっていたところ、「クラーク帰国の際敬宇に贈ったオックスフォード版の福音書4冊は、勝俣銓吉郎氏が所蔵しておられた⁴⁹⁾」という一文に出会った。クラークと中村敬宇は共に静岡学問所の教師で、その生徒でもあった藩主徳川家達は、東京に戻ってから引き続き敬宇から教えを受けていた⁵⁰⁾。そして勝俣銓吉郎は上記早稲田大学蔵書の旧蔵者なのである。

そうしたなか、平成18年秋、徳川林政史研究所に保管されている宗家所蔵漢籍に、前述

『史記』と共通の蔵書印「養賢閣図書記」が押印されていることが徳川記念財団によって確認された（後述付記参照）。引き続き、特集展示『徳川家茂とその時代―若き将軍の生涯』（平成19年1月2日から3月4日まで東京都江戸東京博物館常設展示会場の一画で開催された）の準備のため宗家に残された家茂公関連文書を調査していた記念財団の関係者によって、第14代将軍家茂（いえもち）が江戸城中奥に家臣たちのために学問所をつくり「養賢閣」と名付けた、という文書が発見された⁵¹⁾。この件は上記特集展示の図録の中で報告されている⁵²⁾。

徳川宗家が現在所蔵している漢籍と、学習院所蔵の徳川宗家旧蔵書に、共通の蔵書印が押印されていることが明らかになったのである。

(2) 「杉阪氏蔵書」その他

学習院が所蔵する徳川宗家旧蔵書のなかでは「杉阪氏蔵書」と押印されたものが一番多い（付表参照）。この蔵書印の詳細は未だ不明であるが、なかに3点林復齋の蔵書印が押されたものが含まれている⁵³⁾。

林復齋は第11代大学頭で昌平坂学問所を統括する立場にあった。嘉永7年（1854）にペリーと日米和親条約を結んだ時の日本側全権代表の一人として条約に筆頭署名している（『特別展ペリー&ハリス』〈東京都江戸東京博物館、平成20年〉28頁）。

第12代大学頭林学齋は静岡学問所の開学準備を進めたのち小島奉行に転じ、林一族の多くが当主学齋のいる小島へ移住したという⁵⁴⁾。明治8年4月5日の『海舟日記』に「駒井竹所、御向へ書籍残らず相送る」とあるのは、林一族等旧幕臣たちの蔵書を（華族会館へ寄付するために）徳川家へ運んだと解釈することもできる⁵⁵⁾。

徳川宗家旧蔵書のなかには明治天皇の蔵書印が押されたものもある⁵⁶⁾。これは、徳川家が明治2年から8年まで毎年経費のうちの三千両/円を献金していた⁵⁷⁾二品親子内親王（和宮・静寛院宮・第14代将軍徳川家茂の正室⁵⁸⁾）の旧蔵書の可能性も考えられる。

なお、現在徳川記念財団によって徳川宗家蔵書の調査がなされているとのことである。なかには「養賢閣図書記」「杉阪氏蔵書」と押印されたものが多数あり、明治天皇の蔵書印も見受けられると聞いている。今後その全貌が明らかになったとき、学習院所蔵の徳川宗家旧蔵書の特徴もより鮮明になるであろうと期待される。

4. 学習院が所蔵する徳川宗家旧蔵和漢書の概要（付表参照）

蔵書印、『華族会館寄贈図書目録』および「学習院大学図書館所蔵華族会館旧蔵和漢書目録」⁵⁹⁾（平成15・16年度学習院大学新規重点施策事業「学術資料・文書等の管理と有効利用の在り方調査プロジェクト」の成果物の一つ）等をもとに徳川宗家旧蔵和漢書を凡そ特定して表にまとめた。（目録に間違いや洩れがあるため全資料を特定するのは難しい。）

以下の方法で『華族会館寄贈図書目録』のなかから徳川家寄贈図書を特定した。

- ①『華族会館寄贈図書目録』に「明治13年3月11日戻す」と朱書された8点のうち、4件は「徳川家寄附」、4件は「寄附」とあり、徳川家寄贈図書が『華族会館寄贈図書目録』に「徳川家寄附」または「寄附」と表示されていることを示していた。
- ②目録に「徳川家寄附」とあるのは32件であった。（うち5件は『華族会館誌』の記載内容等から松平頼聡寄贈分と判明した。）
- ③『華族会館寄贈図書目録』と、「学習院大学図書館所蔵華族会館旧蔵和漢書目録」とを照合したところ、前者に「徳川家寄附」とあるものの多くが後者の蔵書印欄に「養賢閣図書記」「杉阪氏蔵書」とあるものと一致した。逆に後者の蔵書印欄に「養賢閣図書記」「杉阪氏蔵書」とあるものは前者に「徳川家寄附」あるいは「寄附」とあり、この2種類の蔵書印が徳川家寄贈図書に押印されていると推定された。
- ④以上から徳川家寄贈と想定される図書を集めると、『華族会館寄贈図書目録』で29番から50番までの番号が付与されていることが判明した。
- ⑤目録に29番から50番までの番号が付された計64件のうち、(ア)「徳川家寄附」「寄附」ではないケースは以下の8件である。29番：購入『国史略』『尺牘寄賞』、鍋島直彬寄附『日本書記』、標記なし『日本政記』。41番：購入『日本政記』、松平頼聡寄附『水経註』『水経註釈地』。46番：松平頼聡寄附『東鑑』。(イ)「寄附」とあり、蔵書印が前記2種と異なるのは次の2件である。30番：寄附『大日本風土記』。48番：寄附『文選』。そこで64件から(ア)(8件)(イ)(2件)を除くと54件になった。
- ⑥次に、目録に「徳川家寄附」または「寄附」とあり、かつ29番から50番の図書を選び出してリストを作成した。
- ⑦リストをもとに、学習院図書館が明治30年以前に使用していた旧原簿、図書目録等と照合して、副本（同一本）が存在しないことを確認した。「明治13年3月11日戻す」と朱書されたもののうち2件は、旧原簿に「焼失」と記されていた。（『華族会館誌』に徳川宗家に戻したとある『名節録』は、『華族会館寄贈図書目録』に記載がなく、原簿等にも該当するものが見当たらなかった。）
- ⑧続いて実物を調査した。「明治13年3月11日戻す」と朱書されたものの所在も確認し

た。(戻されなかったのか、同一書名の別の本と差し替えられたかは不明。)

⑨調査の結果『華族会館寄贈図書目録』に (a)「明治13年3月11日戻す」と朱書されたもの、(b)「徳川家寄附」と記載されているもの(誤記分5件を除く)、(c)明治8年7月「寄附」と記載されていて実物に「養賢閣図書記」または「杉阪氏蔵書」と押印されているものは、徳川家寄贈図書であると判断し、特定した。54件、1142冊となった。

『華族会館誌』の「漢籍44部」との差は「十三経」をまとめて1件とするか13件とするか等の違いと考えられる。

学習院に寄贈された徳川宗家旧蔵和漢書(内訳)

蔵書印＝「養賢閣図書記」	9件	277冊
蔵書印＝「杉阪氏蔵書」	30件	508冊
目録に「明治13年3月11日戻す」と朱書	8件	129冊
その他・目録に徳川家寄附と記載	7件	228冊
計	54件	1142冊
(うち徳川家寄付と記載のあるもの)	27件	779冊)

そのなかには冷泉家や明治天皇から伝来したものもあり将軍家の威光を感じさせるが、幕府旧蔵書(紅葉山文庫、昌平坂学問所、開成所、伝習所等の旧蔵書)は含まれていない。静岡学問所旧蔵書も含まれない。

5. 寄付の背景

ここまでで、徳川宗家から華族会館へ書籍の寄付があった事実は、その書目の詳細をおけば、ほぼ確定したといえる。最後に、そのような寄付が行われた歴史的背景について把握しておきたい。

(1) 明治初期の徳川宗家

慶応4年(1868)4月11日徳川方は新政府に江戸城を明け渡した。第15代将軍徳川慶喜はすでに隠居。田安亀之助(徳川家達)当時6歳が徳川宗家を相続することを許され、駿河府中(現在の静岡)70万石の藩主として同年8月15日任地に到着した。

幕臣のうち新政府に仕えることになった5千人のほかは速やかに屋敷を出て、主に従い駿河に移住するまでの間も、田安邸、紀州邸へ移るように命じられて大混乱となった。空け渡した屋敷は廃墟のようになり、桑や茶が植えられた時期もあったという⁶⁰⁾。

その後明治4年(1871)7月の廃藩置県により藩知事を解任のうえ東京在住を命じられた

徳川家達は、天璋院（篤姫・第13代将軍徳川家定の正室）たちが当時住んでいた尾張藩下屋敷（現在の東京都新宿区戸山の学習院女子大学所在地を含む一帯に位置した）に移り住んだ。そこが明治5年3月兵部省御用となった⁶¹⁾ため、赤坂の勝海舟邸向いの相良邸を購入して転居。そして明治10年千駄ヶ谷に邸を新築して以後そちらに落ち着くことになる⁶²⁾。

なお、徳川家達は明治10年から15年まで従者4人を伴ってイギリスへ留学し、将軍家跡継ぎとして厚遇されたという⁶³⁾。帰国後は第4代貴族院議長として30年間（明治36年〈1903〉から昭和8年〈1933〉まで）、第9代華族会館館長として37年間（明治31年〈1898〉から昭和10年〈1935〉まで）活躍した⁶⁴⁾。

静岡学問所

徳川藩は明治元年（1868）から5年（1872）まで、領地に静岡学問所と沼津兵学校という国内最高峰といえる先進的な学校をつくっていた。ここでは静岡学問所を取上げる⁶⁵⁾。領地が決まると、慶応4年（1868）8月⁶⁶⁾には計画が始動し、幕府の第12代大学頭（昌平坂学問所の長）林又三郎（学斎）が初代学問所頭として準備を進め、開成所、昌平坂学問所、フランス語学伝習所の教授や修業者、蔵書を静岡へ移動させて学問所を開設したといわれる⁶⁷⁾。

学問所の専攻は漢学、皇学（国学）、洋学（英、仏、蘭、独）、数学にわかれ、藩内にとどまらず、全国各藩からも見学者や入学希望者があった⁶⁸⁾。

教授には向山黄村（むこうやまこうそん）（慶応2年〈1866〉渡仏）、津田真一郎（真道）（文久3年〈1862〉オランダ留学）、河田熙（ひろし）（文久3年渡仏）、中村正直（敬宇）（慶応2年英国留学）、外山正一（慶応2年英国留学。後の東京帝国大学総長）他、漢学の教授も含めて、幕府使節団の一員あるいは留学生としての海外渡航経験者が多数含まれていた。明治4年（1871）にはアメリカ人クラーク⁶⁹⁾が理化学教師として赴任した⁷⁰⁾。

ところが明治5年8月に学制頒布があり文部省布達により静岡学問所は廃止され「教官一同は解任され、校舎および付属品はことごとく静岡県庁に移管されたという。」⁷¹⁾

その後図書は明治8年に創立された静岡師範学校に引継がれ、大正14年4月静岡県立図書館葵文庫の開館に伴い、そちらに移管されて現在に至っている。

そのうち漢籍はかなりの量が散逸したと考えられている。学問所の生徒数延べ2,270名の70%、1,710名が漢学専攻、15%、360名が洋学専攻であったのに対して、漢籍は35部375冊しか残されていない一方で、葵文庫の洋書は2,325冊を数えるからである⁷²⁾。

散逸した蔵書の一部は東京に送られたといわれる⁷³⁾。そこで静岡学問所旧蔵書が学習院へも伝来しているのではないかと調査したが、それを示す蔵書印は見つからなかった。

(2) 華族会館

明治2年(1869)6月17日の行政官布達により、諸侯(大名)と公卿(公家)は「華族」と称されるようになった⁷⁴⁾。翌年11月20日、「皇室の藩屏、政府の枢員たらしめる方針」⁷⁵⁾から、各地方に分散していた諸侯は(明治4年7月14日の廃藩置県後は旧藩知事も)東京在住を命じられ、公卿も東京移住を奨励された。この中央集権政策によって諸侯の地位は激変した⁷⁶⁾。

明治4年11月12日から24日にかけて下された勅諭によって、華族たるものは「国民の儀表となり、勉勵して国家の開化富強のためにその本分を尽すべき重大な責務を課された」⁷⁷⁾こと等が「華族会館の設立を促す原動力」⁷⁸⁾となった。明治6年末、河鱈実文、秋月種樹等に尾崎三良が協力して通款社が結成され、中山忠能、松平慶永等は麝香間祇候会議を開催した。両者は岩倉具視の斡旋で合同することになり、明治7年2月4日、発起人たちは「仮規則」四十九条を決定した⁷⁹⁾。その第1条には、

第一条 華族大会館を建設し館中左の諸局を分置する事

会議局、書籍局、講義局、少年勉学局、翻訳局、雑務局、会食所⁸⁰⁾

とある。書籍局は「同族修学の為めに広く和漢洋の書籍を蒐集し展覧に供する所なり」(第3章第19条)。「華族一般の展覧に供する為めに和漢洋有益の書籍を購入すへし。其代価は概算和漢書七千円西洋書三万三千円とす」(第3章第20条)。講義局は「法律学及び其他華族の義務とすべき事を博学多識の人に就き講究する為めに設くる処なり」(第4章第26条)。講義内容は、「第一、万国公法、第二、巴力門〔パーリアメント⁸¹⁾〕之理及び其沿革、附華族の義務権利等、第三、法律、第四、泰西各国政法治乱沿革並風俗の変革等、第五、宗旨の義」(第4章第27条)。勉学局は「壮年の華族子弟を教育する処なり」(第5章第32条)となっている。

条文からこの会館を「将来の政治活動の中心機関」⁸²⁾としようとする意図がうかがえる。

これに対して5月6日、岩倉具視、島津久光、三条実美の三大臣から「華族会館設立に付主意書以下廻示に預り通関之上同盟を約し候儀は本文の通に候。但し仮規則中稍疑議する処あれば敢て愚考を左に条陳す」と7条からなる「見込書」が寄せられた。書籍局については「一時に四万円を費すは無遠慮に似たり。如何となれば洋文の如き同族中是を解する者稀少にして専ら他人の為にするに過ぎす」(四条)、講義局については「講義局を開き月中12度博識者に就き西洋法律以下諸科研究するは美拳と雖も浅学の輩空しく聴聞に流れて実益を得る事稀なるの弊あらん。依て12度の数を減し其減せし日を皇朝古今の法律制度を会話し館員所長の課に応じ適切に反覆討論し疑義を衆評に附し…」(五条)とある⁸³⁾。

岩倉にとって華族会館は「王政護持の中心機関たるべきものであったのである」⁸⁴⁾。

「見込書」の意見は、上記四条五条を含めて、華族たちに受け入れられた。『華族会館誌』には5月22日「在官諸君の意見書に衆議決定の条件を付し之を報道す。其第一二三四五七条衆異議なし。第六条は衆議勉学所を設くるを可とす」⁸⁵⁾とある。

こうして、明治7年6月1日、永田町の旧二本松藩邸に於いて⁸⁶⁾華族会館創立総会は開かれた⁸⁷⁾。

翌明治8年10月7日の臨幸の際に下された勅語により三条、岩倉両大臣が華族の総元締として華族会館に臨むことになり、会館は私立から準官立となったといわれる⁸⁸⁾。

同年11月には華族会館章程が定められ、館内は分局・学務局・書籍局・司計局・庶務局の5局となった。その後学務局が発展して華族学校、すなわち学習院が設立されることになった⁸⁹⁾。

明治9年4月18日には三条実美の推薦で岩倉具視が館長職に就任し「独裁の権」⁹⁰⁾を委ねられて「創立以来の動揺も治まり、会館はようやく軌道に乗った」⁹¹⁾。

「書籍局」

明治8年後半、華族会館に設けられた書籍局(図書室)は小規模なものだったのであろう。『華族会館誌』には開館日の記載が見当たらない⁹²⁾。

同書の索引(索引)に書籍館に関連して「書籍縦覧所落成」明治16.2.27とあり⁹³⁾、該当箇所⁹⁴⁾に「学習院書籍縦覧所落成するを以て各族管長に命し同族に随意閲覧を許すを報せしむ」と記載されている。華族会館が当初目指した書籍館は明治16年に学習院の図書縦覧場という形で実現し、華族たちがいつでも利用できるようになったのである⁹⁵⁾。

華族会館の蔵書数は明治9年10月現在、和書：230種2,940冊⁹⁶⁾、漢書：131種5,882冊、洋書：1,686冊(英：1,212 仏：261 独：213)、計10,508冊⁹⁷⁾で、学習院創立とともにそのほとんどが学習院に寄贈された⁹⁸⁾。

学習院大学図書館が所蔵する「華族会館寄贈図書」は、このように明治7年から9年にかけて華族が自分たちの図書館を作る目的で収集したものである。コレクションリストから当時の日本の上層部が吸収しようとした情報・知識の内容、領域が窺われ、変革期・草創期の熱気が感じられる。

(3) 学習院・学習院図書館

学習院は華族の教育機関として明治10年(1877)華族会館によって設立され、明治17年(1884)宮内省管轄の官立学校となった。開学70年後の昭和22年(1947)私立学校となり、昭和24年(1949)には大学を設立して現在に至っている。設置場所は神田錦町、虎の門、四谷(現在の学習院初等科の所在地)を経て、明治41年(1908)中等学科高等学科は高田村(現在の豊島区目白・学習院大学の所在地)へ移転した。

学習院には開学当初から「図書館・図書室」が設けられていた。『華族会館誌』には開学時に定められた「書器取扱条例」（図書館の規則）が記載されている⁹⁹⁾。

開学時・明治10年12月の蔵書数は和漢書：14,378冊；洋書：1,994冊。そのうち華族会館からの寄贈図書は和漢書：9,159冊；洋書：1,614冊であった¹⁰⁰⁾。

明治16年には図書縦覧場（図書館）が落成した。同年の「書器局の規則」第二章図書縦覧場規則第九条に「縦覧場は本院の職員教師生徒及び其他華族の縦覧する処とす」とあり、閲覧室には華族専用の席が確保されていた¹⁰¹⁾。その後も長く学習院図書館が華族たちに利用されたのであろう。借用中の図書が昭和20年（1945）の空襲で焼失したと連絡する華族・皇族からの葉書が、学習院大学図書館に残されている。

昭和38年（1963）には学部1,2年生を利用対象として図書館が新築された¹⁰²⁾。昭和46年（1971）には「学習院図書館」は「学習院大学図書館」と名称が変更されて、現在は大学中央図書館としての機能も担っている。

学習院が設立後蒙った、火災（明治19年・1886）、関東大震災（大正12年・1923）、アメリカ軍による空爆（昭和20年4月13日・1945）等の被害を図書館は運よく免れ、「華族会館寄贈図書」を含めて開学以来の蔵書を現在も学習院大学図書館が受け継いでいる。

また2個の銅印、「華族会館書籍局印」と「華族会館学務局印」が学習院大学図書館に残されていて、華族会館と学習院の歴史を物語っている。

華族会館が設立された明治7年には佐賀の乱があり、学習院が設立された明治10年には西南戦争が起こった。国内はまだ不穏な状況の下にあった。

その間の明治8年7月10日、もとの大名と公家からなる華族会館宛に旧支配者・徳川宗家が書籍と現金を寄贈した。すると翌9年4月18日には明治政府の右大臣岩倉具視がその館長に就任するという展開であった。

その後明治23年11月に貴族院が開設されて、会館設立時に目指した華族が貴族院議員として活動する道が開かれた。

華族会館は霞会館と名称を改めて現在も存続し、種々の事業が行われている。

おわりに

何故今日まで学習院が徳川宗家旧蔵書を所蔵することが判らなかつたのか等の疑問を抱きながら資料伝来の経緯をたどるなかで以下のことが判明した。

1. 学習院大学図書館所蔵「華族会館寄贈図書」には徳川宗家旧蔵書が相当含まれている。
2. 徳川宗家は依頼を受けて明治8年7月に漢籍・洋書と2千円を華族会館へ寄附した。洋書は華族会館蔵書の60%を占めた。また華族会館は寄附を受けて当時の新刊書を多数購

入した。したがって華族会館の蔵書収集に徳川宗家は多大な貢献をした。勝海舟は建物の借用にも力を貸した。

3. 翌明治9年8月徳川家は華族会館からの寄附金の「取戻し」を考え、その後再び納入している。華族会館の徳川宗家への対応に変化があったと考えられる。
4. 『華族会館誌』には徳川宗家寄贈分の具体的な書名・冊数が記載されていない。
5. 明治10年ごろ華族会館が作成した『華族会館蔵書目録』に徳川宗家分は寄贈者名が記載されていない。
6. 明治12年ごろに学習院が作成した『華族会館寄贈図書目録』では徳川宗家寄贈和漢書の半数ほどに「徳川家寄付」と寄贈者名が付されている。
7. 以上から徳川宗家の援助を受けた事実を記録に残すことに熱意のなかった当時の華族会館と明治政府側の姿勢が感じられる。

今から130年余前の明治8年(1875)10月、勅語により三条、岩倉両大臣が華族の総元締となった結果、両氏が華族会館初期の歴史の前景となり、その他は場面から消されてしまったのであろう。しかし調査とともに華族会館・学習院に高額大部の寄付をした徳川家、松平家、前田家の存在が大きく浮び出てきた。勝者と異なる立場の歴史を伝える資料が存在していた。その当時の記録等は明治維新後100年余を経て種々公刊されることになる¹⁰³⁾。

調査中に、徳川幕府関係者が明治新政府を支えた経緯を示す文章と出会った。

以前に日本を支配していた人々が、静岡でのわたしの協力者であり忠告者になっていた。しかし御門の首府における彼等の後継者達は、これまで大君の手にあった政治の仕事を処理出来なかった。彼等は、政治変革の荒海に国家の舟をしっかりと導くだけの実行の手腕を持っていなかった。

そのため彼等はわたしの友人や、最も利発な学生達を静岡から招聘して、首都での重要な地位に任命した¹⁰⁴⁾。

(E.W. クラーク著、飯田宏訳『日本滞在記』〈講談社、昭和42年〉121頁)

今、天下紛々、不測も又測り難し。

宜しく国家を以て心とし、軽く動くべからず。

既に我が徳川氏の所置の如き、私心を挟まず、天下を以て心とし、

堪え難きに堪え、忍ぶべからざるを忍び、以て今日に及べり。

(『勝海舟日記』明治6年12月1日『勝海舟全集』第19巻所収、455頁)

当時の実態を端的に捉えているといえないだろうか。

旧幕臣のなかには江戸時代末期、開港後の条約改定を目指してパリまで出向きながら目的

を果たせなかった使節団員（例えば河田熙：文久3年、向山黄村：慶応2年）や、留学生（例えば西周、津田真道：文久3年オランダ留学。ライデン大学で法律政治を学ぶ¹⁰⁵）など海外渡航経験者が少なくなかった。日本を取巻く世界情勢¹⁰⁶を体感し、将来の方向が見えていたであろう彼らの見識が、敗者として家を追われ監視を受けながらも、未熟な新政府と戦うのではなく傍観するのでもなく、支援して日本の国益・国民の利益を守ろうという立場を選択させた。その協力で日本は政権交代直後の危うい時期を、植民地にもならず¹⁰⁷、乗り切ることができた。

徳川宗家から華族会館への多額の金子と書籍の寄付も同じ立場からであったろうと考えられる。

今回は学習院が所蔵する徳川宗家旧蔵の和漢書を中心に調査したため、徳川宗家寄贈の洋書、また徳川家寄附金にて新たに購入された洋書については十分に論じることができなかった。別稿を期すことにする。

付記

図書館書庫に埃を被った『華族会館寄贈図書目録』を見つけたとき、次世代のためにこのような図書を準備して国の将来を託したのかと感動で涙が出た。後になって、それは思い違いで実は華族自らのために集めたコレクションであったことが判明した。

華族会館設立の目的に図書館建設があったと知ったときも図書館員として興奮を覚えた。しかし華族即ち後の貴族院議員のための専門図書館は実現せず、かわりに華族たちは長期にわたり学習院図書館を利用したのである。あえて設立者の名を冠した「華族会館寄贈図書」が学習院に存在する理由も別の目的で集めたものを学校に寄附したためと納得できた。

その後『華族会館寄贈図書目録』に「徳川家」が載っているのを見つけ、それが將軍家であることを確認しようとして『華族会館史』を皮切りに芋づる式に関連する文献を手繰っていくにつれて、勝海舟を始めドラマや本で知っている人物が次々と登場してきた。彼らが実際に手にしたであろう資料群が目の前にある、臨場感のある充実したアフター5が続いた。

徳川家寄付の件が今日まで埋もれていたのは想定外の驚きで、「歴史」に目を開かされた。明治維新後100年、120年を経て『勝海舟日記』『華族会館誌』等は公刊された。150年後には様々な資料を基に、新視点から近代日本の歴史が語られるのであろう。

その他在職42年の間に学習院図書館ならではの様々な資料に遭遇し、刺激を受けてきた。その経験を本レポートに織り込むことができた。学習院勤務の賜物である。

本稿は平成18年12月2日に開催された学習院大学外国語教育研究センター学術シンポジウム「近世初頭の出版と学問—学習院大学蔵古活字版『史記』をめぐる—」に「徳川宗家から華族会館へ—古活字版『史記』の収蔵経緯を辿る—」という題で発表した内容をもとにまとめたものである。発表の機会を大沢顕浩教授が与えてくださった。

平成18年4月に「学習院大学所蔵古活字版漢籍の調査」研究プロジェクトが大沢顕浩学習院大学外国語教育研究センター教授を代表とし、高橋智慶応義塾大学斯道文庫准教授、小秋元段法政

大学文学部准教授を客員研究員に迎えてスタートした。そこで学習院が徳川宗家旧蔵書を所蔵していると報告したところ、高橋研究員の紹介で徳川記念財団の学芸員の方々も『史記』の修復歴の調査に参加、学習院所蔵の徳川宗家旧蔵書とその蔵書印を確認された。その後宗家蔵書にも「養賢閣図書記」と押印されていると連絡があったと大沢教授が知らせて下さり、柳田直美德川記念財団学芸部長は写真等貴重な情報を提供して下さいました。また「養賢閣」設立に関する文書を発見した経緯を発見者から直接伺った。こうして「養賢閣図書記」の背景が明らかになっていく過程に遭遇し、シンポジウムで（口頭で）報告させていただいた。

調べたことは纏めておくようにと轡田取学習院大学名誉教授が勧めて下さり、原稿に目を通して下さった。レポートの公表を中田喜万教授が勧めて下さり、投稿にむけてご指導くださった。レポート作成の過程では図書館長、次長、課長、館員の皆さんにバックアップしていただいた。蔵書印については坂田充氏の「学習院大学図書館所蔵華族会館旧蔵和漢書目録 解説」を参照させていただいた。

ご指導くださったたくさんの方々に感謝を捧げて報告のおわりとしたい。

最後に、学習院大学図書館は『華族会館蔵書目録』『華族会館寄贈図書目録』等明治期の目録類の修復を進めていると聞く。学習院の蔵書となって130年を経て、目録のみでなくそこに掲載されている図書そのものにも、修補を要するものが少なくないのが実情である。費用と人員が確保されて、貴重な歴史資料である「華族会館寄贈図書」等とその目録が整備され、利用態勢が整うときを、待ち望むものである。

凡例

引用文は原則として、仮名遣いは原文のまま、片仮名は平仮名に、旧字体・異字体は新字体に改め、適宜句読点を加えた。

注

- 1) 本稿の2.(2) 参照。
- 2) 霞会館華族資料調査委員会編『華族会館誌』（全2巻、霞会館、昭和61年。以下『華族会館誌』と略記）。
- 3) 『徳川家茂とその時代—若き將軍の生涯』（徳川記念財団、平成19年）17、24頁。
- 4) 『勝海舟全集』（全21巻+別巻〈2巻〉、勁草書房、1972-1982年。以下『勝海舟全集』と略記）第18-21巻。
- 5) 読み方について、しょうけい館学芸員大内雅人氏にご指導いただいた。
- 6) 勝海舟の本名。海舟は号。
- 7) 坂田充「学習院大学所蔵高松松平家旧蔵書の概要とその伝来経緯：華族会館旧蔵書研究の一環として」『人文』6号、2007年、302-303、318-319頁。
- 8) 『華族会館誌』にも三千円寄付の記載がある（明治9年10月24日。上巻188頁）。
- 9) 『学習院第一年報』（学習院、明治12年？）56-67頁。
- 10) 霞会館編『華族会館史』（霞会館、昭和41年。以下『華族会館史』と略記）419-420頁。
- 11) 『華族会館史』728頁。
- 12) 『華族会館史』512-515頁。
- 13) 霞会館編『華族会館の百年』（霞会館、昭和50年。以下『華族会館の百年』と略記）311頁。

- 14) 『勝海舟全集』第20巻 24頁。
- 15) 『華族会館誌』は寄贈を受けた和漢書のほとんどを「部」「巻」、洋書を「部」「冊」で表示し、明治9年10月調査による華族会館の蔵書数は和漢書を「種」「冊」で、洋書を「冊」で表示している(注96)、注97)参照。『日本教育史資料』(文部省、明治23-25年)第7巻には、昌平坂学問所の漢籍は「〔正史類〕史記二十本…右正史類百二種二千七百十八本共四十八櫃」(471-472頁)、和学所書籍目録は「〔西南之十五〕小右記八十五卷八十九本 同目録四卷 同別本一卷 右三種九十卷九十四本」(614頁)のように記されている。江戸時代に、具体的冊数を表すのに「本」が用いられたことがわかる。
- 16) 調査したところ、華族会館が付録扱いした数学の解答集を、学習院図書館は(明治37年以降に)独立した1冊として登録したという例もあるが、まれなケースであった。
- 17) 『華族会館誌』上巻 89-90頁。
- 18) 『華族会館誌』上巻 91頁。
- 19) 注40) 参照。
- 20) 『勝海舟日記』の原本は現在、東京都江戸東京博物館が所蔵している。同館は人名等の注を付した翻刻版を「江戸東京博物館史料叢書」として刊行中(明治3年10月24日分まで出版済)。完結が待たれる。それとは別に、全期間を網羅する翻刻版が勁草書房版『勝海舟全集』第18-21巻として1972-1973年に出版された。
- 21) 『勝海舟日記』明治11年12月13日(『勝海舟全集』第20巻所収、222頁)。
- 22) 金崎三郎は尾崎三郎の翻刻の間違いと考えられる(マイクロフィルム版で照合)。
- 23) 徳川家の事務方。
- 24) 『尾崎三良自叙略伝』(全3冊。中央公論社、昭和51-52年。以下『尾崎三良自叙略伝』と略記)上巻107-118頁。なお学習院大学図書館所蔵の華族会館寄贈図書の中に尾崎が当時ニューヨークで入手した日付・サイン入りの図書が含まれている(Henry Wilson, *History of the Rise and Fall of the Slave Power in America*. 1872. サイン: "S.Toda July 1872 New York 明治5年8月新約克戸田三郎")。尾崎は明治6年まで戸田姓。
- 25) 『華族会館の百年』21-22頁。
- 26) 福沢諭吉『新訂福翁自伝』(岩波書店、1978年)149-153頁。
- 27) 清水連郎「瑞穂屋卯三郎のこと」『新舊時代』第1年第10冊(大正14年12月)(複製版:東京、広文庫、1972年)本文44-46頁、写真版3頁。
- 28) 戸沢行夫『明六社の人びと』(築地書館、1991年)24頁。
- 29) 明治6年5月豪商大黒屋榎本六兵衛から徳川宗家に献金させた三万円を資本として、海舟はいわば私設の徳川銀行を始めた。溝口八十郎勝如が頭取格で海舟は貸付方。利用者は旧幕臣、旧大名、公家など。貸出金額は2円から2万円まで。その目的は旧幕臣の経済的救済、金融のアミの目を張ることによる徳川家臣団の動向の掌握・統制、徳川宗家の経済的基礎の安定であったと『勝海舟全集』(勁草書房版)の編者勝部真長は推測している(『勝海舟全集』第19巻538-539頁、第20巻459-460頁)。卯三郎も「徳川銀行」を利用したのである。
- 30) 明六社の資金関係について大久保利謙は「重要な問題であるが、ハッキリしたことはわからない」という(大久保利謙『明六社』〈講談社、2007年〉267頁)。
- 31) 当時2か月で新規に洋書1,000冊を取り揃えるのは至難の業といえるが、それを海舟は指示して、1週間後にはリストが届いている。海舟に何かあてがあったのだろうか。考えられるのは、瑞穂屋在庫分に合わせて、丸屋(丸善の旧社名)、ハルトリー等から入手したほか、洋書のかな

りの部分を明六社社長森有礼（後の文部大臣）から入手した可能性である。森は商業学校（一橋大学の前身）設立の資金の一部に充てるために、図書館を開く目的でアメリカで購入した本を全て文部に売却したといわれる。そして、明治8年2月9日に文部省管轄となった書籍館（国立国会図書館の前身。4月8日に「東京書籍館」と改称）が文部省から交付された蔵書1万冊のうち洋書5千余冊は森有礼の私文庫だったものといわれる（細谷新治『商業教育の曙』如水会学園史刊行委員会〔編〕、〈如水会、1990-1991年〉上巻 142-150頁）。卯三郎が海舟のもとに最初に書目を持参したのが1月22日、洋書納入は3月10日で、書籍館が文部省管轄となった時期と重なっている。森の商業学校協同創立者・富田鉄之助（後の日本銀行総裁）は海舟が長男小鹿の米国留学に随行を命じた人物であるという関係も考えれば、海舟が商業学校設立に協力するためにも、森有礼旧蔵書の一部を購入して活かそうと考えた可能性は大きい。もしそうであれば、勝海舟、瑞穂屋卯三郎、尾崎三良、森有礼といった当時の先進的な人々のおもいが結集した1000冊余の洋書が徳川宗家から華族会館に寄贈され、学習院に伝えられたことになる。今後調査を進める予定である。

- 32) 醍醐忠順副館長を指すと考えられる。（有栖川宮初代館長は辞任して、当時館長職は空席。）
- 33) 『江戸東京博物館 勝海舟関係資料 海舟日記（四）』（東京都、平成18年）149頁。なお、駒井竹所は明治3年4年（当時海舟は静岡に滞在中）と8年4月2日、4月5日、9年1月24日、10年1月7日と、11年8月以降は度々、海舟の日記に登場する。（日記にほとんど登場しない明治5年以降11年8月まで駒井は静岡在住か。）
- 34) 『尾崎三良自叙略伝』上巻 151頁。
- 35) 明治3年閏10月1日に定められ家禄の制で、徳川家の家禄は約2万1千石となった。（家禄二一、〇二一石、明治5年から7年3カ年平均の石代相場は五円三七〇一四、金禄元高一一二、八八五円七一二九四。それを根拠に徳川宗家は明治9年、五六万四千四百二十八円五六銭四厘七毛の金禄公債を受けた）（辻達也「明治維新後の徳川宗家」〈『専修人文論集』60号、1997年、77、84頁）。旧禄高による割当に関しては、明治8年12月5日華族に頒布された「華族会館章程」全26章（『華族会館誌』上巻106-114頁）の第24章 本館費用金 第1条に次のようにある。

本館資本入費として一時禄税及び賞典禄を除算し家禄に応じ遞差出金する如左

二万石以上	十分の一
一万石以上	十五分の一
五千石以上	二十分の一
二千五百石以上	二十五分の一
千石以上	三十分の一
六百石以上	六十分の一
二百石以上	六十五分の一
二百石以下	七十分の一

但し従前書籍局建設の時既に出金せし者は其数を減除すへし

この割当てにより、費用のほとんどを武家華族が負担したこと、徳川宗家も十分の一の負担（金禄11万2千円の10分の1、約1万円か）をしたことが伺える。また、「其数を減除すへし」という但し書に従って徳川宗家が寄附金二千円を取戻そうとした可能性が考えられる。しかし華族会館は、明治9年2月2日、「〔徳大寺〕実則及び山内豊誠客歳書籍局を開くの際既に資本金額の4分1を納し、今又其4分1を減却せずして更に全額を納し客歳既納の金は額外の寄附

- となす」とあり（『華族会館誌』上巻131頁）、寄附を拒んではない。その事実を8月11日の嵯峨殿との内話で知らされて、徳川家側は再度納付することを検討したのではないだろうか。なお、『法令全書』明治2己巳年[第五百四拾四]六月十七日（沙）の〔参照〕として藩知事表が記載されている（『明治2年法令全書』〈内閣官報局、明治20年〉221-229頁）。（金沢藩、鹿児島藩に続き、徳川宗家の静岡藩は序列3番目。家禄2万石以上は計10藩。水戸藩は5千7百73石。戊辰戦争における各藩の立場が家禄に反映されたことが伺える。）武家華族たちは、表に記載された家禄高によって華族会館の費用を負担したと考えられる。
- 36) 『海舟日記』解説（『勝海舟全集』第20巻所収、449-454頁）。
- 37) 東京府知事（在任期間：1872年5月25日-1875年12月19日）。無名だった海舟を発掘し、ともに江戸城無血開城に貢献した元会計総裁。
- 38) 『勝海舟全集・別巻1』（勁草書房、1982年）は同じ書簡を、年を特定せずに記載している（151頁）。
- 39) 保科順子『花葵』（毎日新聞社、1998年）13、74、94頁。
- 40) 学習院の図書原簿は明治37年ごろ過去に遡って書き換えられた。書き換え前の原簿と明治期に使用された蔵書目録類は『華族会館蔵書目録』『華族会館寄贈図書目録』も含めて、大学図書館書庫にまとめて保管されている。大学図書館は現在これら目録類の整備を進めている。
- 41) 洋書目録には寄贈者名等は付されていない。いわば分類目録で、著者名は片仮名で、書名は日本語で記載されている。（現在調査中。）
- 42) 『学習院一覧』（学習院、明治30年-昭和18年？）参照。
- 43) 因みに学習院図書館の長は組織上、明治40/41年から昭和22年まで図書課長であった。昭和23年以降は図書館長。『職員録』に宮内省の職名として図書課長が登場するのは大正9年以降である（『国立公文書館所蔵明治・大正・昭和官員録・職員録集成 [マイクロ資料]』〈日本図書センター、1990年〉参照）。
- 44) この目録とは別に、図書館には表紙も表題紙も欠落した目録が残されている。最終ページの図書の欄に「明治15年3月16日竹腰政美寄附」と記載されているので、明治15年まで使用されたと考えられる。分類別に記載（1門：経書他、28部、446冊。2門：政事他、62部、129冊。3門：天文他、55部、186冊。4門：博物他、62部、255冊。5門：文集他、35部、255冊。6門：正史他、96部、1213冊。7門：書牘他、23部、89冊。8門：叢書他、108部、812冊。総計：469部、3385冊）。当初学習院の和漢書目録としてこの2種類が用いられ、明治16年に、和書（国典）と漢籍に分けて図書も目録も整備されたことを、残された目録類は物語っている。
- 45) 徳川家旧蔵書を特定する目的で『華族会館寄贈図書目録』の内容をさまざまに並べ替えてみた。「番」順に並べて繰り返し眺めているうちに、番毎に含まれる書籍の量がほぼ同じであることに気が付き、「番」は書籍が収められていた書棚の番号であると推測するにいたった。目録の1-4番は『大日本史』（明治7年6月徳川昭武寄附）。30-50番はほとんど徳川宗家寄附分。51-53番は概ね8年7月購入分。111-115番は会館発起人寄贈の『四書輯疎』。その後番号なしで『史記』（唐本）他の13年4月徳川茂栄寄贈本や、『西南慰勞巡廻日誌』などとなり、明治7年から10年ごろまでの華族会館の動きが反映されているようにおもわれる。
- 46) 華族会館の前身「通欵社」（明治6年末結成）の初代会頭として書籍館建設を提案していた（『華族会館誌』上巻10頁）秋月種樹書籍監長を中心に、その明治8年7月10日から1ヶ月弱の在任期間に多数の図書を購入したと考えられる。概ね8年7月購入分が中身を占める『華族会館寄贈図書目録』51番から53番の内容を以下列挙する。

- (8年7月より前の購入分には*印を、8年7月より後の購入分には**印を付した。)
- 51 番：聴訟指令、類聚仏国刑法、訴訟便覧、訴訟類編、憲法類編、* 仏国政典、* 布告類編、交際公法、国際法、英国裁判所略説、* 英国刑律摘要、* 英国法律全書、裁判議案、* 擬律必携、議事院談、議事院談、新律附例解。
- 52 番：万国新史、日本地名箋、米國政治略論、** 陸宣公奏議、化学読本、学問のすすめ、合衆國憲法、泰西史鑑、軍陣衛生論、元明史略、啓蒙朝鮮史略、英国憲法、** 西国立志編、民選議院論綱、条約国史略、真政大意、西洋新書、政治略論。
- 53 番：** 魯国新史、万国公法、万国地誌略、北海紀行、米政撮要、土着提要、地質学、地理略、** 理学新論、** 立会略則、和蘭邑法、和蘭邑学制、和蘭邑学制、和蘭邑州法、合衆国史略、会社弁、開知新編、海軍図識、海軍沿革論、** 各国立憲政体略、大政官布告書、泰西農学、連邦商律、草木六部耕種法、租税全書、那破倫兵法、農政本論、訓蒙二種、軍艦刑法、傑民万邦史略、經濟小学、* 布告全書、* 物理階梯、* 仏国学制、** 仏国史略、布告累纂、航海新説、航海教授書、瀛環史略、英氏經濟論、英国海軍律令全書、英政治革論、英式艦砲全書、議員選挙法、共和政治、教育如何、小学物理書、植物学訳解、自由之理、修身論、司法職制法、植物生理学、清英交際始末、西洋政治談、西洋軍制、政学提綱。
- 47) 早稲田大学所蔵：英和對譯袖珍辭書（江戸、開成所、慶應3 [1867] 年）、一橋大学蔵：新序10 卷（東都 [江戸]、岡田屋嘉七）。両校の蔵書印はその後徳川記念財団によって確認された（前掲『徳川家茂とその時代』17 頁）。
- 48) 以下の方法で調査し、それを基に判断した。渡辺守邦、後藤憲二編『新編蔵書印譜』（青裳堂書店、平成13 年）の印文索引（541-570 頁）、第二字印文索引（571-589 頁）から「閣」を含むものを抽出、計23 件となった。うち明治期以降のもの7 件：秘閣図書之章（太政官）、内閣文庫、香雪閣（三条実美）、観潮閣（森嶋外）、宝宋閣（向山黄村）、言志閣（国分青厓）、振衣閣（岡鹿門）。徳川家・松平家のもの8 件：観涛閣（松平頼寛）、考信閣（高松藩松平家）、尚古閣（徳川治保）、垂裕閣（徳川斉修）、潜龍閣（徳川斉昭）、披雲閣（高松藩校）、文明閣（徳川茂承）、鳳鳴閣（徳川慶篤）。その他の大名家のもの3 件：尊経閣（〔前田家〕尊経閣文庫）、観瀾閣（仙台藩伊達家）、鳳翔閣（内籐政陽）。その他5 件：薰華閣（東家）、蔵充閣（皆川良礎）、漱芳閣（浅野梅堂）、葆先閣（立原翠軒）、聆涛閣（吉田聆涛閣）。
- 49) E.W. クラーク著、飯田宏訳『日本滞在記』（講談社、昭和42 年）解説 235 頁。
- 50) 辻・前掲書、72 頁。
- 51) 発見した藤田英昭氏（徳川記念財団研究員）より御教示を得た。
- 52) 前掲『徳川家茂とその時代』17、24 頁。
- 53) 坂田充「学習院大学図書館所蔵華族会館旧蔵和漢書目録 解説」（学習院大学文学部「学術資料・文書等の管理と有効利用の在り方調査プロジェクト」作業委員会編『学習院大学所蔵京都学習院旧蔵書目録・華族会館旧蔵和漢図書目録・立花種恭・種忠旧蔵書目録・乃木文庫目録・福羽美静文庫目録』〈学習院大学、2005 年。以下『学習院大学所蔵京都学習院旧蔵書目録・華族会館旧蔵和漢図書目録…』と略記）所収）79 頁参照。
- 54) 松浦元治「元町奉行鳥居耀蔵の清水日記」田村貞雄編『徳川慶喜と幕臣たち』（静岡新聞社、平成10 年）。
- 55) 「杉阪氏蔵書」は、このとき旧幕臣たちから集められた蔵書に新たに名付けられた可能性も考えられる。「松平」の松を杉に、平を阪に換えて命名したと著者は推理した。（勝安房→勝安芳、

- 駒井実温→駒井竹所、大久保忠寛→大久保一翁、神保長興(?)→神保霞栖等の当時の一連の改名の流れからの連想。)
- 56) 明治天皇の蔵書印を確認したのは坂田充氏である(坂田、前掲「学習院大学図書館所蔵華族会館旧蔵和漢書目録 解説」78頁参照)。
- 57) 『勝海舟日記』明治元年12月15日、2年5月14日、8月29日、9月1日～5日、9年9月5日、9月12日の項(『勝海舟全集』第19巻所収、131、159、183、184、185頁、第20巻所収、87、89頁)参照。
- 58) 『華族会館誌』には明治10年9月13日、「故ニ品親子内親王静寛院宮を芝増上寺徳川氏の兆域に葬る」とある(上巻224頁)。
- 59) 『学習院大学所蔵京都学習院旧蔵書目録・華族会館旧蔵和漢図書目録…』所収、[53]-74頁。
- 60) 辻・前掲書、52-53頁。
- 61) 因みに学習院女子大学4号館は近衛騎兵連隊の兵舎として使われた建物である。
- 62) 保科・前掲書、29頁、『勝海舟日記』明治4年9月24日、明治5年3月13日、4月17日の項(『勝海舟全集』第19巻所収、353、381、386頁)。
- 63) 『読売新聞』1877(明治10)年11月27日朝刊3面「徳川家達(亀之助)君は英吉利龍動へ着されて…」他。
- 64) 貴族院は明治23年(1890)から昭和22年(1947)まで存続した。華族会館は明治7年(1874)に創立され、昭和22年(1947)に霞会館と改称された。家達の在任期間は両者の存続期間の半分を超えていたことになる。
- 65) その創設から廃止までの経緯は『静岡県教育史』通史篇上巻(同書刊行会、昭和47年)162-180頁に詳しい。
- 66) 慶応4年9月8日を以って明治と改元された。
- 67) 前掲『静岡県教育史』通史篇上巻166-167頁、山下太郎『静岡の歴史と神話』(吉見書店、昭和58年)32-34頁。
- 68) 前掲『日本教育史資料』第1巻189-190頁、前掲『江戸東京博物館 勝海舟関係資料 海舟日記(四)』131-132頁。
- 69) 静岡に最初に足を踏み入れた欧米人。ラトガース大学出身。当時大学には畠山義成、岩倉具定等の日本人留学生が学んでいた。海舟に人選を依頼されたグリフィス(福井藩の明新館で教えていた)の勧めで静岡学問所の教師となる。フルベッキ(大隈重信・伊藤博文などの人材を育てたお雇い外国人)とも交流があった(クラーク・前掲書 解説 231-243頁、他)。
- 70) 前掲『静岡県教育史』通史篇上巻173-174頁。
- 71) 前掲『静岡県教育史』通史篇上巻180頁。前掲『日本教育史資料』は「役員一同被免」(第1巻190頁)、静岡県史料刊行会編『明治初期静岡県史料』(静岡県立中央図書館蔵文庫、昭和42-46年)は「教師不残免職ス」(第4巻135頁)と記載。
- 72) 石田徳行「静岡学問所旧蔵漢籍再考—清水市立清水小学校所蔵本を中心に—」(『葵』15号、1981年、3-7頁)。生徒数は前掲『日本教育史資料』第1巻 191頁参照。
- 73) 山下・前掲書、34頁。
- 74) 明治二己巳年六月[第五百四十二]六月十七日(達)(行政官)官武一途上下協同之 思食を以て自今公卿諸侯之称被廢改て華族と可称旨被 仰出候事
但官位は可為是迄之通候事(前掲『明治2年法令全書』221頁)。
その後明治17年(1884)華族令が制定され、明治維新等における国家への勲功者が新たに華

- 族に加えられた。(木戸・大久保家はそれより前、明治11年5月23日に華族に列せられた。)
- 75) 『華族会館の百年』3頁。
- 76) 『華族会館誌』上巻2-3頁、『華族会館の百年』3-4頁。
- 77) 『華族会館の百年』4-5頁。
- 78) 学習院百年史編纂委員会編『学習院百年史』(全3冊。学習院、昭和55-62年。以下『学習院百年史』と略記)第1編 74頁。
- 79) 『華族会館の百年』5-12頁、『華族会館誌』上巻19-27頁。
- 80) 『華族会館誌』上巻20頁。
- 81) 『華族会館の百年』11頁。
- 82) 『華族会館の百年』11頁。
- 83) 『華族会館誌』上巻42-45頁。なお、第六条には「方今政府最も心を教育に注し普く学校を布くを以て務とし博学有志の徒も亦競て学校を設立すれば、同族中志ある者は此諸校に入を可とすへし。蓋し勉学局の説たる士庶同学の諸校と違ひ他族と混せされは、交際に狭くして多聞に乏しからん。且つ各局事務をして一時に斉進せしむる事難ければ、暫く猶予し追て衆論を採り学則を議定し漸次著手して未だ遅しとせず」とある。当初、岩倉達は華族のための学校設立にも消極的であったことが伺える。
- 84) 『華族会館の百年』32頁。
- 85) 『華族会館誌』上巻48頁。「見込書」に配慮して、勉学局の規模を縮小して勉学所としてスタートさせたことが伺える。なお、勉学局は明治8年7月11日に設置された(『華族会館誌』上巻91頁)。
- 86) 当時の華族会館所在地：1. 浅草本願寺(台東区西浅草1丁目5番)(明治7年2月6日-4月12日)。2. 工部省所属鉾山寮(丹羽氏旧二本松藩邸)(千代田区永田町2丁目4番)(明治7年4月13日-11年8月20日。明治8年10月7日明治天皇の行幸に際し、旧藩邸774坪を特旨を以て下賜されたが、明治11年外務省より清国公使館にするため家屋譲渡の要求を受け、移転)。3. 学習院構内(千代田区神田錦町2丁目11番)(明治11年8月22日-15年9月17日)(『華族会館の百年』298-299頁)。住所表示は昭和50年のもの。
- 87) 『華族会館誌』上巻53-56頁、『華族会館の百年』13頁。
- 88) 『華族会館の百年』17-18頁。
- 89) 『学習院百年史』第1巻 75頁。
- 90) 「権宣を以て館長の投票を停し岩倉氏を推して館長となし委するに独裁の権を以てし」とある(『華族会館誌』上巻153頁)。
- 91) 『華族会館の百年』26頁。なお、華族会館初期の実情は尾崎三良「華族会館創設濫觴」(『尾崎三良自叙略伝』上巻 144-153頁)に詳しい。岩倉が「殆んど朝命の如き嚴命を下し」て事をすすめ(148頁)、明治8年10月に下された詔勅により「凡そ華族たる者は悉く会員たるべきの義務あり、乃ち又会館入費として総華族旧禄高に割当て徴収したる金額七十余万円に上り、之に依つて華族会館は富裕なる団体と為れり。其後学習院を創設し、専ら華族の子弟を教育する所と為りしも、此資金の半額を其費に充てり」(151頁)。「今の隆盛を見るに至りしも、最初即ち明治六年、予の誘導に依り寥々たる小華族数氏の発起に係りしものが其種子と為りしことを忘るべからず」(152-153頁)とある。尾崎はなぜか、書籍館の件を勝海舟に依頼したことには触れていない。
- 92) 明治9年1月5日、開館式における書籍局長鍋島直彬祝詞に「本局架上の書籍小大遺さず総

て旧年の塵埃を払ひ」とある（『華族会館誌』上巻120頁）。同日の庶務局長万里小路通房の祝辞には「本館今日の急務は速に学校を創立し書籍局を建築するより急なるはなし」とある（『華族会館誌』上巻122頁）。しかし、明治9年2月17日、「本館各局費用金の月額を定め定額外の費用を以て役員等を雇用するを禁す」とあり、合計1500円の内、書籍局は60円で最も少ない。（本館即ち上局：750円、学務局：220円、書籍局：60円、司計局：170円、庶務局：300円、総計：1500円。右1ヶ年18000円）（『華族会館誌』上巻138頁）。

93) 『華族会館誌』下巻480頁。

94) 『華族会館誌』上巻382頁。

95) 「書籍縦覧所」は『学習院第六学年報告』には「図書縦覧場」と記されている（注101参照）。

96) 内訳：和書69種 巻数1,922冊、訳書：102種 同658冊、近世諸家著書：50種 同351冊、教則：9種 同9冊。以上を加えて、和書：230種2,940冊とした。

97) 漢書、洋書はそれぞれ、「漢書 百三十一種 同五千八百八十二冊」「洋書 英 千二百十二冊 仏 二百六十一冊 独 二百十三冊」とある（『華族会館誌』上巻189頁）。

98) 『華族会館史』422頁。

99) 『華族会館誌』下巻599-600頁。

100) 『学習院百年史』第1巻162-163頁。

101) 『学習院年報』明治16年（＝『学習院第六学年報告』自明治十五年九月至明治十六年八月）6-12頁。「十六年一月十一日書器局開場に付同日より左の規則を施行せり」とあり、第十条には「縦覧場を別けて三区と為し第一区は本院の教師職員の席とし第二区は本院生徒の席とし第三区は総て外来人の席とし互に他席に就て閲覧することを許さす」とある。「書器局は学習院貯蔵の図書及び教授器械を総轄する処」（第一条）であった。「書器局」が管理する「図書縦覧場」は『華族会館誌』には「書籍縦覧所」と記載されていて（上巻382頁）、当時、「図書館」の名称がまだ定まっていなかったことを物語っている。なお、学習院大学図書館所蔵の洋書のなかの十九世紀発行の法律、政治、経済書等の多くは、当時の華族たちのために備えられたと考えられる。

102) 『学習院百年史』第3巻 674-677頁。

103) 『尾崎三良自叙略伝』は昭和51-52年（1976-77）に出版された。これを上梓して知人に配布することを父から託された子息は昭和10年「若し将来幾十百年の後、世態変化し之を公にするも差支へなきに至らば、子孫宜しく之を公にすべし。それまでは之を筐底に秘するは、独り予のみにあらず我一家の自衛上已むを得ざるなり」と書き残したという。（同書まえがき）。

昭和47-48年（1972-1973）出版の『勝海舟日記』に関しては、「昭和2年から4年にかけて出されました改造社版『海舟全集』に、この『海舟日記』がおさめられたのですが、これはほんの一部でございまして、おそらく当時としては、薩長藩閥との関係もあって、公開できない部分がたくさんあったからだろうと思います。それも、いまになれば公開してもよろしいという勝家のお許しを得まして、こんど全部この全集に入れたいと思います」とある（『海舟研究1』2-3頁〈『勝海舟全集18』〈勁草書房〉付録〉）。

公刊までに100年余を要した実情を物語るものである。

104) 原文は以下のとおり。“The men who formerly ruled Japan were therefore my associates and advisers in Shidz-u-o-ka. But their successors at the Mikado’s capital found themselves unable to manage the affairs of government, hitherto left in the hands of the Tycoon. They had not the practical skill to guide the ship of state with steadiness through the troubled waters of political change.”

Therefore they sent to Shidz-u-o-ka and called away my friends and my brightest students, assigning them important positions at the capital.” (E. Warren Clark, *Life and Adventure in Japan* (New York, c1878), pp.[128]-129). 原著は翻訳が出る 89 年前 (明治 11 年) にアメリカで出版された。

105) 同年のオランダ留学生には榎本武揚もいた。

106) 江戸時代、いわゆる鎖国中も江戸幕府だけは海外の動きを把握していた経緯もある。長崎出島にオランダ船が到着するたびに海外情勢を幕府宛に報告させて (「オランダ風説書」、この極秘情報により老中たちはフランス革命等の海外の動きを知ることができたのである。なお、学習院大学は、『和蘭風説書集成』の底本となった箕作阮甫による写本『荷蘭上告文』を所蔵している。

107) 当時のドイツ公使プラントは次のように述べている。「私は蝦夷を旅行する間に、この土地はヨーロッパ人の植民地として格別に適していると確信することができた。…かくして蝦夷は、この島の攻略を真剣に勘案した最初の強国の好餌となりうる土地であった。日本政府周辺では、特にロシアのサガレン (樺太) 進出にこうした危惧を抱いたに違いない。多数の諸侯を用いて蝦夷島を分治させたのは將軍側のこうした懸念の現われであった。1871 年、帝の政府は蝦夷の植民事業を本格的に継承することに決した。」(M.v. プラント著、原潔、永岡敦訳『ドイツ公使の見た明治維新』〈新人物往来社、昭和 62 年〉194-195 頁)。プラントは 1860 年来日、1875 年シナ公使に転出した。

表 学習院に寄贈された 徳川宗家旧蔵和漢書 (仮)

(『華族会館寄贈図書目録』より抽出)

蔵書印	寄贈者	その他 記載	年月	購入/ 寄贈	号	番	書名	冊数	その他印 (抄)	備考	(推定) 寄贈者	請求記号
義賢閣図書記	徳川家寄附		8.7	徳川家寄附	5	31	史記論文	25			徳川宗家	422/68
			8.7	徳川家寄附	4	37	四書撮言	24				112/2
			8.7	徳川家寄附	20	45	史記	50				422/58
			8.7	徳川家寄附	16	49	東坡全集	40				303/33
	寄附		8.7	寄付	11	30	常山紀談	10				051/37,38
			7	寄付	73	40	逸史	12				412/32
			8.7	寄附	4	31	明紀事本末	30				425/20
			8.7	寄附	25	33-34	通鑑綱目	59		60冊?		422/65
杉阪氏蔵書	徳川家寄附		8.7	徳川家寄附	8	31	宋書	16			423/18	
			8.7	徳川家寄附	6	31	梁書	8	林復斎蔵書印		423/20	
			8.7	徳川家寄附	7	31	南斉書	8	林復斎蔵書印		423/22	
			8.7	徳川家寄附	9	31	北斉書	4	林復斎蔵書印		423/25	
			8.7	徳川家寄附	10	31	五代史	8			424/6	
			8.7	徳川家寄附	17	35	玉堂綱鑑	24			422/42	
			8.7	徳川家寄附	16	35	晋書	30			423/15	
			8.7	徳川家寄附	5	42	欽定儀礼義疏	50			113/59	
			8.7	徳川家寄附	6	42	欽定周官義疏	40			113/59	
			8.7	徳川家寄附	7	43	欽定礼記義疏	70			113/59	
			8.7	徳川家寄附	19	46	唐書	82			424/1	
			8.7	徳川家寄附	21	46	唐鑑音註	6			424/3	
	寄附		8.7	寄付	5	29	晏子春秋	3			116/37	
			8.7	寄付	2	30	韓非子	5			116/10	
			8.7	寄付	3	30	韓非子識誤	2			116/10	
			8.7	寄付	1	30	管子全書	13			116/8	
			8.7	寄付	4	30	荀子箋釋	8			116/9	
			8.7	寄付	2	38-40	論語	4		十三経之内	111/2	
			8.7	寄付	2	38-40	礼記	24		十三経内	111/2	
			8.7	寄付	2	38-40	穀梁伝	6		十三経之内	111/2	
			8.7	寄付	1	38-40	公平伝	7			111/2	
			8.7	寄付	2	38-40	考経	1		十三経之内	111/2	
			8.7	寄付	2	38-40	易経	6		十三経内	111/2	
			8.7	寄付	2	38-40	左氏伝	24		十三経内	111/2	
			8.7	寄付	2	38-40	爾雅	3		十三経内	111/2	
			8.7	寄付	2	38-40	周礼	14		十三経内	111/2	
			8.7	寄付	2	38-40	書経	6		十三経内	111/2	
			8.7	寄付	2	38-40	毛詩	20		十三経之内	111/2	
	8.7	寄付	2	38-40	孟子	5		十三経之内	111/2			
	8.7	寄附	2	38-40	儀礼	11		十三経内	111/2			
その他	徳川家寄附	十三年三月十一日戻す	8.7	徳川家寄附	9	32	白田草堂集	12			303/14	
			8.7	徳川家寄附	18	36	文章正宗	23			303/17	
			8.7	徳川家寄附	31	36	文章達徳録	6			303/14	
			8.7	徳川家寄附	8	47	白氏文集	25			303/6	
	寄附		8.7	寄付	12	30	皇朝戰略編	15			403/1	
			8.7	寄付	8	30	古今鍛冶備考	7			684/3	
			8.7	寄付	27	32	韓文起	10		全部焼失	(全部焼失)	
			8.7	寄付	3	45	文選	31		全部焼失	(303/10)	
	徳川家寄附		8.7	徳川家寄附	1	50	唐文粹	24	冷泉府所		戻し書込み無	303/12
			8.7	徳川家寄附	3	31	史記正本	15	(明治天皇)			422/65
			8.7	徳川家寄附	10-12	32	三蘇文抄	24				303/18
			8.7	徳川家寄附	30	36	文章弁体	12				303/5
			8.7	徳川家寄附	15	36	文章規範	2				303/21
			8.7	徳川家寄附	3	37	四書匯參	32				112/3
寄附	8.7	徳川家寄附	10	44	五礼通考	119				113/62		
	8.7	寄付	14	48	文選	61	滝村		31冊?	徳川宗家? 303/10		
	8.7	寄付	6	30	大日本風土記	22	中川		内5冊不足	451/28		
從四位松平頼 聡精力所集	徳川家寄附		8.7	徳川家	8	60	三礼義疏	127			松平頼聡 113/60	
			8.7	徳川家	67	61	三才図会	80			03/44	
			8.7	徳川家	54	71	山堂肆考	80			03/45	
			8.7	徳川家	11	82	陳書	13			423/24	
			8.7	徳川家	47	83	南巡盛典	48			255/2	

内訳 蔵書印=「義賢閣図書記」 9件 277冊
 蔵書印=「杉阪氏蔵書」 30件 508冊
 目録に「明治13年3月11日戻す」と朱書 8件 129冊
 その他(目録に徳川家寄附と記載) 7件 228冊
 計 54件 1142冊
 うち目録に徳川家寄附と記載 27件 779冊

参考文献

華族会館関連

- 霞会館華族資料調査委員会編 『華族会館誌』（霞会館、1986年）
霞会館編 『華族会館史』（霞会館、1966年）
霞会館編 『華族会館の百年』（霞会館、1975年）
秋月種樹 『華族会館創設事略』（河鱈実文、1889年）
坂田充 「学習院大学所蔵高松松平家旧蔵書の概要とその伝来経緯：華族会館旧蔵書研究の一環として」（『人文』6号〈2007年〉293-330頁）
坂田充 「学習院大学図書館所蔵華族会館旧蔵和漢書目録 解説」（『学習院大学所蔵京都学習院旧蔵書目録・華族会館旧蔵和漢書目録・立花種恭・種忠旧蔵書目録・乃木文庫目録・福羽美静文庫目録』〈学習院大学、2005年〉75-83頁）

学習院関連

- 学習院百年史編纂委員会 『学習院百年史』（学習院、1980-1987年）
『学習院年報』（学習院、1877-1893年）
『学習院一覽』（学習院、1897-1943年？）

徳川宗家関連

- 辻達也 「明治維新後の徳川宗家」（『専修人文論集』60〈1997年〉47-84頁）
保科順子 『花葵：徳川邸おもいで話』（毎日新聞社、1998年）
徳川記念財団編 『徳川家茂とその時代—若き将軍の生涯』（徳川記念財団、2007年）
徳川記念財団編 『家康・吉宗・家達—転換期の徳川家』（徳川記念財団、2008年）

勝海舟関連

- 『勝海舟全集』18巻、19巻、20巻、21巻、別巻1、別巻2（勁草書房、1972-1982年）
『勝海舟全集』別巻『来簡と資料』（講談社、1994年）
『江戸東京博物館史料叢書 勝海舟関係資料 海舟日記』（3）（4）（東京都、2005-2006年）
板倉聖宣 『勝海舟と明治維新』（仮説社、2006年）

静岡学問所・葵文庫関連

- 静岡県史料刊行会 『明治初期静岡県史料』（静岡県立中央図書館葵文庫、1967-1971年）
静岡県立教育研修所編 『静岡県教育史』通史篇上巻（静岡県教育史刊行会、1972年）
文部省総務局課 『日本教育史資料』1巻、7巻（文部省総務局、1890-1892年）
山下太郎 『明治の文明開化のさきがけ：静岡学問所と沼津兵学校の教授たち』（北樹出版、1995年）
山下太郎 『静岡の歴史と神話：静岡学問所のはなしを中心に』（吉見書店、1983年）
E.W. クラーク著 飯田宏訳 『日本滞在記』（講談社、1967年）
Clark, E. Warren, *Life and Adventure in Japan*. (New York, American Tract Society, c.1878)
影山昇 「明治初年の静岡藩の学校教育」（『放送教育開発センター研究紀要』11号〈1994年〉81-128頁）
『葵』1, 5, 10, 12, 18, 20, 28（静岡県立中央図書館、1974-1994年）
『同方會報告』1号（明29.6）-15号（明33.4）『同方會誌』16号（明33.10）-65号（1941.11）復刻版（立体社、1977-1978年）

その他

- 『尾崎三良自叙略伝』（中央公論社、1976-1977年）

『尾崎三良日記』(中央公論社、1991-1992年)
細谷新治 『商業教育の曙』如水会学園史刊行委員会 [編] (如水会、1990-1991年)
大久保利謙 『明六社』(講談社、2007年)
福沢諭吉 『福翁自伝』 新訂 (岩波書店、1978年)
東京都江戸東京博物館編 『特別展ペリー&ハリスー泰平の眠りを覚ました男たち』(東京都江戸東京博物館、2008年)
松方冬子 『オランダ風説書と近世日本』(東京大学出版会、2007年)
安藤優一郎 『幕臣たちの明治維新』(講談社、2008年)
明治の讀賣新聞 [CD-ROM版] (読売新聞社メディア企画局データベース部、1999年)

蔵書目録等

『蔵書目録』会館書籍局・『華族会館蔵書目録』(学習院大学図書館所蔵。未公開)
『蔵書目録』学習院・明治十二年十月『華族会館寄贈図書目録』学習院図書課 (学習院大学図書館所蔵。未公開)
学習院大学文学部「学術資料・文書等の管理と有効利用の在り方調査プロジェクト」作業委員会編 『学習院大学所蔵京都学習院旧蔵書目録・華族会館旧蔵和漢図書目録・立花種恭・種忠旧蔵書目録・乃木文庫目録・福羽美静文庫目録』(学習院大学、2005年)
『江戸幕府旧蔵図書目録』(葵文庫目録)(静岡県立図書館、1970年)
小川武彦、金井康編 『徳川幕府蔵書目』(ゆまに書房、1985年)
渡辺守邦、後藤憲二編 『新編蔵書印譜』(青裳堂書店、2001年)
A Classified Catalogue of the Books in the English, French and German Languages of the Tokio Shoseki-kwan or Tokio Library. (Tokyo, Tokio Shoseki-kwan, 1876)

以上

ENGLISH SUMMARY

Books from Tokugawa Shogunal Household through Kazoku Kaikan to Gakushuin Library

Atsuko HIROSE

The Gakushuin University Library owns books which formerly belonged to the Tokugawa Shogunal Household. How the present author discovered this fact and why it was unknown to this day are described in this report.

Kazoku Kaikan, or The Peer's Club, established in 1874, planned to have its own library. Ozaki Saburo, the manager of the club, visited Katsu Kaishu for help. Katsu replied that he would make efforts. On 10 July 1875, his former master, Tokugawa Iesato, contributed 1100 Japanese and Chinese books, over 1000 books in Western languages, as well as 2000 yen to *Kazoku Kaikan*.

In 1877, *Kazoku Kaikan* founded Gakushuin, the Peers' School, transferred its book collection, and became Gakushuin Library client. The library collected books for teachers and students, as well as for peers, future members of the House of Peers.

The author found these facts in Katsu Kaishu's diary, published between 1972 and 1974; in *Kazoku Kaikan-shi*, published in 1986; and in Ozaki Saburo's memoirs, published in 1976 and 1977. All items came out more than a century after the Meiji Restoration. The victors governed for a long time and delayed the publication of their records. During that time, with limited information, we were unable to know what took place after the Restoration.

This library collection reflects various scenes of the early modern history of Japan.

Key Words: Tokugawa Shogunal Household, *Kazoku Kaikan* (Peer's Club), Gakushuin Library, KATSU Kaishu, Meiji Restoration.